

新渡戸稲造における地方（ちかた）学の構想と展開

—— 農政学から郷土研究へ ——

並 松 信 久

目 次

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 はじめに | 2 農政学との出会い |
| 3 農政学の前提 | 4 台湾糖業政策の実施 |
| 5 地方学の確立に向けて | 6 郷土会と諸科学の形成 |
| 7 郷土研究と地方学 | 8 結 語 |

要 旨

新渡戸稲造（1862-1933、以下は新渡戸）は地方学（ちかたRuriology）を唱えた。地方学は地方ではなく、地域を対象とする学問である。新渡戸は豊かな国際経験を生かすとともに、郷土としての日本に関心をもち、各地域の様々な事象を対象とする地方学を提唱した。新渡戸については、これまでその国際性やキリスト教との関係を論ずる研究が数多く出されている。しかしそれらに比べて地方学について論じられた研究は数少ない。本稿では、新渡戸の地方学が構想される過程を追ひ、さらに地方学の提唱によって、新たに形成された学問分野の展開を追った。

新渡戸は著名な著書『武士道』を執筆しているが、ほぼ同時期に『農業本論』という著書を執筆している。新渡戸は札幌農学校の出身であり、農業や農政学には関心をもっていたが、『農業本論』は新渡戸によれば農政学の前提のつもりで執筆したものであった。しかし『農業本論』はわが国の農政学に対して、それほど影響を与えなかったものの、農業に関連する幅広い分野を扱っている。新渡戸はこの幅広い分野を地方（ちかた）という枠組みでとらえようとした。『農業本論』は農政学の前提というよりも、地方学構想のきっかけであったといえる。

新渡戸は著書の執筆だけでなく、実際に地方学に関連する地域振興に携わっている。それは台湾の糖業政策であった。新渡戸は台湾での経験を生かして、日本の大学では初めての植民政策の講義を行なっている。この講義では土地利用の重要性が説かれるが、これは「土地と人間生活との関係」を解明するという目的をもつ郷土研究へと結びついていく。

新渡戸が提唱した地方学は、地方の歴史、文化、風俗習慣を研究し、都市にはない農村の良さを発見することによって、地方の活力を高める必要性を説いたものであった。地方学は農村の救済という目的

のもとで成り立つものであったが、農村という限られた地域だけでなく、国全体のあり方、広くは人類史の展開にも関わるものであった。

柳田国男（1875-1962、以下は柳田）は、この新渡戸の地方学の提唱に影響を受け、新渡戸を主催者とする郷土会を発足させている。この場合の郷土は、新渡戸のいう地方^{ちかた}とほぼ同一であった。新渡戸の地方学は、結局、体系立てられた学問とはならなかったが、郷土会を通して、多くの科学が誕生するきっかけとなる。たとえば柳田の民俗学であり、小田内通敏（1875-1954、以下は小田内）の人文地理学であった。しかし柳田の民俗学は、自ら農村生活誌の研究であると語っているので、経済的な考察に弱いとみられてしまう欠点をもち、小田内の人文地理学は数多くの調査に基づいているものの、共通性・普遍性・法則性という科学としての要件に欠けていた。

キーワード：新渡戸稲造、地方学、郷土研究、柳田国男、小田内通敏

1 はじめに

明治政府は日露戦争をきっかけとして、国家の財政難とともに、都市では精神的疲弊が進み、地方農村では経済的貧困が顕在化したととらえた。日露戦争直後から実施された「地方改良運動」とよばれる一連の地方政策は、こういった問題の克服をめざした明治政府による一大事業であった。明治政府が「地方」に焦点をあて、具体的に全国各地で運動を展開したのは、近代日本においてこれが初めてであった。

しかしこの地方は地域のことでない。地方とはあくまでも中央からみた地方（改良）であり、ここには地域を主体に運動を展開しようという意図はみられない¹⁾。一方、わが国における地方（ちかた）は、地方（ちほう）とよびかえられる過程で、「ちかた」は疎外され、中央に直結する「ちほう」が確立することになる。これがまさに地方改良運動の対象となる「ちほう」そのものであった²⁾。このような状況のなかで、新渡戸稲造（1862-1933、以下は新渡戸）は地方学（Ruriology）を唱える（以下では、地方を「ちかた」と称するのか、「ちほう」と称するのか、重要な点であり、紛らわしい部分にはルビを付したが、すべてにルビを付すと煩雑となるので、基本的に前後の脈絡に依拠した。ただし「地方学」の場合は、すべて「ちかたがく」である）。

ところで近年、新渡戸という人物が注目されたきっかけは、日本の紙幣の肖像画となったことである。肖像画となることで、新渡戸は知名度を高めた。なぜ新渡戸が選ばれたのであろうか。日本の紙幣は肖像画を選ぶ際に、常にテーマを設定している。たとえば、聖徳太子・伊藤博文・板垣退助は「憲法」がテーマであった。新渡戸の場合は、福沢諭吉（1835-1901、以下は福沢）・夏目漱石（1867-1916、以下は夏目）とともに、そのテーマは「近代化」であった³⁾。もちろん福沢、夏目、新渡戸は近代化をテーマに選ばれたとはいえ、周知のように三者とも近代化を単に賛美したというわけではない。この三者が共通して指摘したのは、日本では物質的あるいは技術的な近代化が先行してしまっ

ていて、その精神がともなっていないという点であった。三者は根源的に近代精神を問題にしていた。とくに本稿でとり上げる新渡戸は、多くの著書において日本に既存の精神と、近代精神とのつながり、あるいは結びつきを模索した。とくにそれは『武士道』などの著書にみられるように、国際社会における日本の近代精神を模索するものであった。しかし新渡戸は近代精神の模索を『武士道』だけに求めたのではない。農業や地方^{ちかた}にも求めた。新渡戸は『武士道』とほぼ同時期に著書『農業本論』を刊行し、この著書のなかで地方学に触れ、その後、農政学ではなく、地方学を展開している。『農業本論』は農業や農政学に関連する著書としてとらえられているが、新渡戸はこの分野にとどまっていない。近代日本を意識した地方学へと展開している。

これまでの新渡戸に関する研究においては、日本思想史における『武士道』の位置付け、農学研究、とくに農業経済学における『農業本論』の位置付け、そして郷土研究の展開という視点から「地方学」を議論した研究成果は多くみられる。さらに国際関係という分野における新渡戸の貢献を詳細に検討した研究成果も数多い⁴⁾。しかしながら、それぞれの分野に関連させた研究、とくに新渡戸はなぜ地方学を提唱したのかという視点に立って、その関連を明らかにした研究は、あまりみられない。そこで本稿では新渡戸の地方学が、どのように構想され、どのように展開していったのかを考察することにする。

本題に入る前に、新渡戸の経歴を年表風に簡単に振り返っておく。新渡戸は1862（文久2）年に、現在の岩手県盛岡市に盛岡藩士であった新渡戸十次郎の三男として生まれる。そして札幌農学校（現・北海道大学）に2期生として入学する。札幌農学校創立時に副校長（実質的には校長）として1年契約で赴任したクラーク（William Smith Clark, 1826-1886）は、新渡戸の入学時には、すでにアメリカへ帰国していた。クラークの滞在は短かった（約10ヶ月間）ものの、その影響は大きかった。とくに直接指導した1期生に対しては、「倫理学」の授業として聖書を講じたので、1期生はほぼ全員がキリスト教に入信した。2期生も1期生の「伝道」によって入信し、クラークが残していった「イエスを信ずるものの誓約」に署名していた。

もっとも新渡戸の場合には、すでに札幌農学校入学以前からキリスト教に関心をもち、英語版聖書を札幌農学校に持ち込んでいるほどであったので、1期生の勧めに応じて、即座に誓約に署名している。その後、同期の内村鑑三（1861-1930、以下は内村）、宮部金吾（1860-1951、植物学者）、廣井勇（1862-1928、土木技術者）らとともに、函館に駐在していたメゾジスト系の宣教師M.C. ハリス（Merriman Colbert Harris, 1846-1921）から洗礼を受けている。この洗礼の後に、新渡戸はキリスト教から本格的な影響を受ける。

新渡戸は東京大学（後に名称が変わり、帝国大学、そして東京帝国大学という名称になる）へ進学する。卒業後の1882（明治15）年に農商務省御用掛となり、同年11月には札幌農学校予科教授となる。しかし翌83（明治16）年には農商務省御用掛を退き、同年9月に東京大学専科生となって、

英文学・理財学・統計学を学ぶ。この東京大学も翌 84（明治 17）年には退校して、私費で渡米して、ジョンズ・ホプキンス大学へ入学する（渡米当初はペンシルヴェニア州のアレゲニー大学へ入学）。この頃に新渡戸は伝統的なキリスト教信仰に対して懐疑的となり、クエーカー派の集会に通い始めて、その正式会員となっている。クエーカー教徒との親交を通じて、後に妻となるメリー・エルキントン（Mary Elkinton, 1857-1938）と出会っている。

新渡戸はアメリカ留学中に札幌農学校助教授に任命され、ジョンズ・ホプキンス大学を中退して、1887（明治 20）年に官費でドイツへ渡り、ベルリン大学やボン大学で農業史や社会政策に関連する科目を学んでいる。その後、農学を学ぶためにハレ大学へ移り、ハレ大学から博士号を得て帰国し、教授として札幌農学校に赴任する⁵⁾。しかしながら札幌農学校に赴任した後に体調を崩し、1897（明治 30）年に札幌農学校を退官して、群馬県で静養する。この静養中に『農業本論』（1898 年）を出版している。さらにカリフォルニア州へ転地療養に行っている。この療養中に『武士道』（*BUSHIDO: The Soul of Japan*, 1900）を英文で執筆する。『武士道』の執筆時は、日清戦争の勝利などで日本および日本人に対する関心が国際的に高まっていた時期であり、『武士道』初版は各国語に訳されベストセラーとなっている⁶⁾。これによって今日に至るまで新渡戸は『武士道』の著者として著名である。

新渡戸は療養から復帰した後、第一高等学校校長、東京殖民貿易学校校長、東京帝国大学教授、拓殖大学学監、東京女子大学学長などを歴任する。1920（大正 9）年の国際連盟の設立に際して、『武士道』の著者として国際的に高名となっていた新渡戸が、事務次長に選出される。新渡戸の晩年には、日本が国際連盟を脱退しナショナリズムが高揚するなかで、「我が国を滅ぼすものは共産党と軍閥である」との発言が新聞紙上に取り上げられ、軍部や右翼の激しい反発を買うという事件を起こす。対外的には反日感情を緩和するためにアメリカへ渡って、日本の立場を訴えているが、「新渡戸は軍部の代弁に來たのか」とアメリカで理解されず、失意の日々を送っている。晩年の新渡戸は国内的にも国際的にも認められることが少なかったようである。

最晩年の 1928（昭和 3）年に新渡戸は東京女子経済専門学校（後の東京文化短期大学）の初代校長に就任し、1929（昭和 4）年には学監を務めた拓殖大学の名誉教授に就任する。その後、1933（昭和 8）年にカナダのバンフで開かれた太平洋調査会会議に日本代表団団長として出席するため渡加する。この会議終了後、当時国際港のあった西海岸ヴィクトリアで倒れて永眠する。

2 農政学との出会い

新渡戸は前述のように札幌農学校へ進学しているが、新渡戸の読書は旧約聖書をはじめキリスト教関係の書籍が大部分を占めていた。新渡戸は農学の勉学よりも、キリスト教の勉学をしていたというほうが正確かもしれない⁷⁾。しかし、それによって本来の勉学の目的が失われていたわけではない。

新渡戸はキリスト教の基盤の上に立って、自己のための学問を非として、社会のために、徳心をもって社会国家の利益を第一とすることが、学問の目的であると考えていた。

新渡戸の考え方には終生にわたってキリスト教の影響がみられるものの、そもそも新渡戸は、なぜ農業や農学に関心をもったのであろうか。新渡戸によれば、

回顧すれば、余が始めて農学に志したるは、実に明治九年にして十四歳の春なり。（中略）今上東北を御巡行あらせられ、旧南部領三本木駅に御駐輦^{ちゅうれん}の折から、辱^{かたじ}けなくも伯兄の家を仮りの行在所に充てさせられ、爾時恐れ多くも先考の存生せし日に、祖父の業を継ぎて疎水の功に尽力し、荒蕪の地を拓きし事ありしを御追賞せられ、異数の寵賜を辱^{かたじ}ふせしのみならず、子弟負荷の任に力^{つと}むべき趣の御聖旨をも給はりしかば、挙家感泣の余り、われら三人の兄弟も、祖父の遺志を継ぎ皇恩^{りゅうあく}の隆渥なるに報ひんとて、始めて各自の志を立つることゝなりたり⁸⁾。

ということである。1876（明治9）年に明治天皇が東北を初めて巡幸した折に、新渡戸の祖父が開拓した三本木に立ち寄り、祖父の家に泊まった。この巡幸の後、新渡戸は家族から開拓の苦勞について聞かされ、開拓者の道を選ぼうと決心した⁹⁾。

新渡戸における農業研究は主に明治20年代から30年代にかけて行なわれたので、比較的若い時期から関心をもっていたといえる。1890（明治23）年の29歳の時に、ドイツ（ハレ大学）の教授の指導下で“Über den Japanischen Grundbesitz, dessen Verteilung und Landwirtschaftliche Verteilung”という学位論文をまとめている。さらに1898（明治31）年の37歳の時に、札幌農学校での講義をまとめた『農業発達史』、そして『農業本論』を刊行している。

『農業発達史』（この著書で日本初の農学博士号が授与される）と『農業本論』はともに、それまでの新渡戸の勉学や研究をまとめたものである。学生として過ごした札幌農学校での勉学、東京大学での欧州発達史や社会学、J.S. ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）の経済学などの勉学、ジョンズ・ホプキンス大学での経済史や経済学などの研究、ベルリン大学におけるシュモラー（Gustav von Schmoller, 1838-1917）の農業史やワグナー（Adolf Heinrich Gotthilf Wagner, 1835-1917）、マイツェン（Friedrich Ernst August Meitzen, 1822-1910）らの講義などが新渡戸の著書の執筆へと結びついている。

ところで新渡戸は1884（明治17）年に東京大学を去って、アメリカ留学を決意している。その理由は、宮部金吾（1860-1951、札幌農学校における新渡戸の同期生、植物学者）宛の書簡によれば、

ぼくは、“大学”の授業に愛想がつかしました。大学では、思う存分教えを受けられるものと思っていたが、そうではありません。本はたくさんあるが、良い先生にとぼしいのです。外山は“英

語”をよく教えることができない。われわれはハムレットを学んでいるが、あまりむずかしいと見れば、かなりのページを飛ばしてしまうのです。コックスは、文章構成法に忠実な、たんなる旧式の文法教師にすぎない。われわれの論文を添削した程度から判断しても、あまり尊敬できそうにありません。彼は思想に富んだ人ではない。外山の歴史も、また、たいへんお粗末なもので、彼には教科書の内容がどういう意味であるかということ以外は、ほとんどわからないのです。哲学の方は、もっとよくわかるかもしれないが、ぼくはそれを授業にとっておりません。田尻氏の“経済学”は好きだが、“経済学”の時間が非常に少なく、もっぱら自習によって教室での講義の不足をおぎなっています¹⁰⁾。

という状況であったからである。新渡戸はお粗末な教授陣だけでなく、日本の学界があまりにも遅れていると感じて、アメリカへ行く決心をしたようであった。

新渡戸は1884（明治17）年10月から1887（明治20）年5月まで、約3年間にわたってジョーンズ・ホプキンス大学の歴史・政治学科の大学院で留学生活を送る。しかし当時のジョーンズ・ホプキンス大学はアメリカで最初に大学院を設置してから、わずか8年間しか経過していない状況にあり、大学院は未だ確立期にあった¹¹⁾。一般的に新渡戸はこのジョーンズ・ホプキンス大学で農政学と農業経済学を学んだとされることが多い。しかしこれは新渡戸が帰国後、札幌農学校で農政学と農業経済学を担当したことから生まれた憶測にしか過ぎない¹²⁾。というのは新渡戸の留学当時、ジョーンズ・ホプキンス大学には、農政学ないし農業経済学の科目や講義がなかったからである。新渡戸も後に、

農政学或は農業経済を調べる積りであったが、（中略）世人も知る通り英米では30年前は政府が直接農業に関係する事はなかった。従って農政に当る文字さへもなかった故に指導教師の切な勧告によって日米関係史なるものを調べた¹³⁾。

と回想している。アメリカで農業経済学が講義されるようになるのは、1905（明治38）年頃からであり、1910（明治43）年頃からやっと本格的に講義が行なわれるようになった¹⁴⁾。

しかし農業経済学の科目がなかったとはいえ、新渡戸が農業や農政学とまったく無関係な科目を学んだというわけではない。1885（明治18）年11月の書簡において、

このほか、“土地問題”（“農業経済”、農政）の研究に時間を多くあてています。実際、ぼくは“農業経済”に重きをおき、それに他のなによりも多くの時間をさいているのです¹⁵⁾。

と書いている。新渡戸が履修した歴史・政治学ゼミナールでは、地方自治体や土地制度の歴史を中心テーマとしていたが、新渡戸はとくに土地問題に関心をもったようであった。

新渡戸はこの土地問題に関連してイリー（Richard Theodore Ely, 1854-1943）から講義を受けている。このイリーの講義について、後に回顧して、

マルクスのお話を、初めて私が聴いたのは、今より四十五年前である。ちやうど亜米利加に留学してゐる頃で、ジョンズ・ホップキンス大学の経済学の教授をしてをられるイーリー先生からであつた。その頃、すでに大家であつて、今は八十の齡に達してゐられるイーリーといふ人は当時の社会問題、殊に社会思想、社会主義の最高のオーソリティであつた。そこで、私のをつた大学では、イーリー先生の講義が毎年あつて、その題は社会主義論といふのであつたが、その頃に初めて私は、マルクスといふ人の説を聴いた¹⁶⁾。

イリーは社会主義論だけでなく、経済学の講義をしていた。新渡戸はイリーから社会主義について初めて知ったとしているものの、イリーの経済学はそれほど独創性のあるものではなかったようである。イリーは著書『経済学の過去と現在』において、イギリス古典経済学とマンチェスター学派を批判しているが、その批判はイリーがドイツで学んだ新歴史学派などの見解をそのまま引用しているにすぎないものであった¹⁷⁾。

新渡戸はまた、イリーの講義について、

先生が講義をしてそれを吾々が書取る。参考書としてスペンサーを読んだものである。東京の帝国大学ではスペンサーを教科書のように使った。ところが此处では参考書として使っているのである。亜米利加は教育の程度が大変低いのだなと思った。（中略）日本で僕が二年前に読んでしまったミルを参考書にするなんて、よほど日本の学問の方が進んでいると思った。ところが書物の使い方が非常に違う。例えばスペンサーにしても外山さんはただ棒読みを読んでくれた。宜いか悪いか知らぬけれども、本にこう書いてある、故に結論はかくの如し、それで済んだのである。社会はとにかくこういうように進むものだ、こう決っている、動かすべからざるオーソリティである。そういう風に習った。ところが亜米利加に行ってみると、スペンサーはこういっているけれども、これは間違っている。ローシャーなどはこの筆法では進んでいない。これは如何にも英吉利に掬われた思想である。人類というものとはそうはならない。此处はこういうつもりで考えなくてはならぬ、これはイングリッシュソサイティという考えで読まないで間違うぞ、こんな調子である¹⁸⁾。

と語っている。新渡戸は教えられた内容はともかくとして、基本的な学習方法をイリーから学んだようである。

新渡戸は前述のように、ジョンズ・ホプキンス大学を中退して、1887（明治20）年に官費でドイツへ渡る。そしてベルリン大学でドイツ歴史学派のシュモラーから農業史を学んでいる。当時のベルリン大学は、シュモラーらを中心に社会政策のための歴史的・統計的な実証研究が行なわれ、それに基づいて「歴史学派」が形成された時期であった。新渡戸はワグナーの財政学と社会主義に関する講義、マイツェンの統計学とその演習をとっているが、当時の歴史学派の学問的な方法は、統計的な調査とフィールドワークを重視したものであった。シュモラーは実証主義の立場から、経験的個別研究と精密な理論は断絶しているのではなく、個別的な研究を、一般理論のための準備作業と位置付けていた。シュモラーによれば、国民経済組織は「自然的・技術的原因」と「心理学的・倫理的原因」とから成り立ち、とくに心理学的・倫理的原因が究明されることによって、国民経済学が科学として成立するとしていた¹⁹⁾。個別実証研究や心理学的・倫理学的要因の重視は、新渡戸のその後の学問展開に大きな影響を与える。

しかし新渡戸はシュモラーの学問を展開していこうとしたわけではない。依然として農学に関するこだわりはもち続けている。そこで農学ではハレ大学が良いと考えて、ハレ大学へ移り、そこで農業経済学を学び学位論文を提出する。もっとも当初からハレ大学の学位取得を考えていたわけではなかったようである。新渡戸は博士号の取得にはボン大学が有利であると考え、一旦ボン大学へ戻っているが、ボン大学では博士号の取得は困難であった。またベルリン大学も同様で、博士号の取得は困難であり、その結果ハレ大学での学位取得となった（ジョンズ・ホプキンス大学では学位を取得していないが、名誉文学士が贈られている）。

学位論文のテーマは“Über den Japanischen Grundbesitz, dessen Verteilung und Landwirtschaftliche Verwertung”『日本土地制度論』（1892年）²⁰⁾であった。この論文では、土地所有問題や自作農、小作農、分益農などに関する問題が扱われている。土地所有権の根拠や農業問題に関する比較研究も行なわれているが、これらはJ.S.ミルの影響がみられる。

新渡戸は前述のようにジョンズ・ホプキンス大学で「日米関係史なるもの」を学んだと記しているように、農政学以外の科目も学んでいる。新渡戸は1891（明治24）年に『日米関係史』という著書を刊行しているが、これはジョンズ・ホプキンス大学の博士論文として作成されたものであった。しかしこの論文はドイツへ行く前に完成させることができなかったものの、ドイツ留学を終えて帰国する年に博士論文ではなく、著書としてアメリカで出版されている。その内容は、ペリーの開国交渉以前の日本と諸外国とのかかわりを概観することから始まり、日米和親条約、日米修好通商条約の締結までの経緯、そして近代日本におけるアメリカの影響の紹介などであった。

この著書は学術書というよりも、先行研究や個人的な見聞にしたがって、日本をアメリカに紹介し、

それによって両国の絆を深めようとする意図に基づく啓蒙的なものであった。新渡戸は『日米関係史』の刊行と同年の1891（明治24）年に、『ウィリアム・ペン伝』や『建国美談』などの著書も刊行している。これらの著書に共通しているのは、新渡戸が原理主義的な思考態度を求めるのではなく、状況即応的な柔軟さ、具体的な事象に即して物事をみる現実重視の姿勢であった。

新渡戸はこれらの著書を通して、アメリカの現実重視の姿勢を評価している。しかしこの一方で、アメリカの個人主義や功利主義という倫理道徳面については、むしろ批判的であった。新渡戸はこれらをアメリカがもたらした「暗い側面」²¹⁾と説明している。これに対して新渡戸は日本の伝統を強調して、

封建制度は、政治制度としては失敗したとしても、社会制度としては多くの貴い道徳的特徴をこれまで発展させたのであった。今日の個人主義的な社会組織が、日々の人間関係を現金の貸し借りで成り立たせているのとは違って、封建制度は、人々を仲間同志の間の個人的絆で結びつけたのだった²²⁾。

と語る。新渡戸は欧米の個人主義と功利主義を批判する一方で、日本の共同意識や共同社会の美点を評価する。これが後に日本の農村社会や農村生活に関心を向けるきっかけとなった。

しかしながら、新渡戸は一方的に個人主義を批判し、その一方で共同体主義を賛美しているわけではない。後に著書『日本文化の講義』（Lectures on Japan, 1936）において、

異なった国民には異なった特徴があるのは、否定できない。（中略）基本的には、人間は精神において一つであり、この基本に向かってわれわれは近づいている。一方、われわれは、相互の相違点を理解し、調整するよう努めねばならない。そして、そのためには、相違点の実体は何かをよく研究し、できれば、その実体を正確に知ることが、われわれの義務である。そのことなしには、この世界は、より貧しいものとなる。変化は、人間の生活を豊かにする。したがって、われわれは、国民性における多様性をむしろ歓迎すべきである²³⁾。

と語る。新渡戸の意図は個人主義と共同体主義のいずれかに特化するというのではなく、自他の特徴と相違点をみて、それぞれの個性を尊重しつつ共存することを考えている²⁴⁾。こういった視点が地方学の構想をもたらすことになる。

3 農政学の前提

著書『農業発達史』では、新渡戸の農業観が示されている。農業について、

「業」とは営利の意を含み利殖の為に事に従ふ義なり。所謂道楽或は名誉の爲になすものは之を業と称せず、故に保養の為に田園に下りて耒耜を執り、暇あれば親ら耕耘培養するを樂み、若くは學術試験の為に菽麦を播きて其生育に専心意を凝らすが如きは農業と称するに足らず。

右の解釈によれば農業とは利殖の目的を以て人類衣食住の需要に供せんが為に動植物を生産する吾人の活動を云ふ²⁵⁾。

と述べる。農業に対する見方として、資本主義的（あるいは合理主義的）な視点が説かれている。新渡戸は農業を利殖の目的をもった活動であると定義して、資本主義的経営を農業経営のあるべき姿ととらえる。しかし実際の農業は、新渡戸の考えるようなものではなかったが、新渡戸は道楽、名誉、保養、学術などを目的にしているのは農業とはいえず、営利や利殖を目的にしているのは農業経営ではないという。新渡戸によれば、商品経済のもとでの活動として農業は行なわれるべきものであり、農業は営利や利殖を得るための手段であるという。

新渡戸は、この営利や利殖について、たとえば古代のエジプト、ギリシャ、ローマなどの農業に関しても、同様の考え方があったという。つまり新渡戸の営利や利殖は、必ずしも資本主義のなかで生み出されるものではない。この意味で、新渡戸による資本主義的な農業は、不明瞭な点が残されていた。

新渡戸は農業経営の規模についても問題視している。とくに土地兼併を問題視して、ローマ帝国の滅亡の原因を、

小民をして一旦恒産を失はしむれば彼等は無職業として遊惰の民として到底放侈に陥ることを免がれざるべし、是に於て或は浮薄となり或は惨忍となりて国家に危険なる原素を萌発せしむ、亦一には兼併したるものは奴隸労働を盛となすべし、是に於て無責任なる寧ろ国家を怨望し破壊的を喜ぶ有害なる原素を多くすることゝなりぬ²⁶⁾。

と記している。土地兼併が奴隸制を生み出し、粗放経営となってしまうので、農業の衰退を招き、国家の滅亡を導いたとしている。新渡戸は、所有者自らが耕作する手作地主経営が望ましい形態であると考えていたようである。新渡戸によれば、土地生産性や労働生産性は所有に大きく関わっている。しかしながら新渡戸の主張は資本主義と農業との関係に不明瞭さを残したままであったので、農業経

営に対する見方も曖昧なものであった。新渡戸は小農保護的な地主農政を保護しようとしたのでもなく、資本主義的な農業経営を推奨しているわけでもなかった。

ところで新稲戸は1897（明治30）年の病氣療養中に、今後の著述計画を立てている。それは大きく三つに分かれ、「一、“農政学の前提”（もっと正しく言えば、農政学研究序説）、二、“農業史”（二ないし三巻）、三、“農政学”（二巻）」²⁷⁾ というものであった。1898（明治31）年に刊行された『農業本論』は、この著述計画の第一番目の「農政学の前提」として書かれたものであった。新渡戸の凡例によると、

本書は『農業本論』と題せるも、余の本旨は『農政前提』を綴り、以て『農政』の序論たらしむるにあり²⁸⁾。

と書かれており、農業に関する哲学的な考察というよりも、農政の前提となる農業概論的なものであるとされている。

『農業本論』は版を重ねるごとに手を加えられているが、全体の構成には変化がなく、全10章の構成となっている。前半の第4章までは教科書的な内容であり、第5章以降に新渡戸の独自性が出ている。『農業本論』は全体的に欧米の学説の影響がみられるが、前半部分はその学説の紹介にとどまるものであるが、後半部分は欧米の学説のなかで新渡戸が、とくに注目する点を強調しているということである。具体的には前半部分で農業や農学の定義や分類について説明がなされ、後半部分では農業と様々な社会問題との関連が課題となっている。第5章以降の構成は、

第5章 農業と国民の衛生、第6章 農業と人口、第7章 農業と風俗人情、
第8章 農民と政治思想、第9章 農業と地文、第10章 農の貴重なる所以

となっている。

『農業本論』は農政の前提となる概論的なものであるので、当然のこととして、幅広い分野が扱われている。農業経済学者の東畑精一（1899-1983）が、

彼は農を語るに専門を以てしないで、文人の語を以てしている。こういう風に専門科学をものにしてだけでなく、文学哲学社会学等の諸学を自家菜籠中のものとしているようなタイプの学者は、今日では求むべくもないからである。『農業本論』が出版されて、当時（恐らく今日も或る程度まで然りであるが）としては稀なことであるが、この書の読者は専門領域のものを突破して一般世人の間に広まったし、新渡戸博士は単なる農学者を超えている学究だと、一挙に世人に

印象づけてしまったのである²⁹⁾。

と評しているように、農業に関連する幅広い分野が扱われている。しかしこれによって広範な読者の関心を集めたとはいえ、専門的な分野への実質的な影響となると、それほど大きくなかったとされている。もっともこのようにみられているのは、新渡戸が農政学の確立をめざしていたということが前提条件となっているからである。しかし新渡戸は後に、農政学にとらわれることなく、農業に関連する様々な専門分野を、地方あるいは地域という枠組みでとらえた。それまでの新渡戸の経歴からすれば、むしろ農政学という枠組みでとらえるよりも、地方や地域という枠組みで考察を深めたと考えるほうが、ごく自然だといえる。

『農業本論』の内容をたどっていこう。農業と農学の関係については、とくに前半部分の第3章で「農業に於ける学理の応用」を述べている。農業には学理の応用が困難であるとして、

農の業たる、室内に於てするにあらずして多く野外にあれば、偶発明^{たまたま}ありとも、之を秘法として
 永く利益を独占する能はず、刻苦新法を案出するも、忽ち他の知る所となりて十分の酬を得ざる
 也。かくて尚ほ焦心を敢てするもの、夫れ多きを得んや³⁰⁾。

と記している。そして、農学と農業との関係が密であったとしても、実用という点で、まだ満足な結果が得られていないとする。これは農学という学問との両立が困難であるという農業が本来もっている特徴に由来するものであるとして、農学は、

他の学問と同じからずして、学理を講ずるを以て主とせず、寧ろ実利を挙げむとするの目的をも
 並び行はれしむるなり。故に、已に述べたるが如く、素^{もと}と学問と実業とは其目的及方法を異にする
 に関らず、この二者を同時に達せんことを欲望する誤謬より、屢々論理的に科学原理を統一す
 ること能はざるに至る³¹⁾。

と語る。農業は学問と実業を両立することが望まれるが、それは難しいという。新渡戸は自身の農政学の確立をめざして、このような問題を抱えていた。

しかし農政学という枠組みにとらわれなければ、農学と農業の両立の可能性は残されている。新渡戸は『農業本論』の「第二章 農学の範囲」において、農学が何を対象とするのかについて語っている。そのなかで「地方学」に触れている。新渡戸は、

余は「地方学」と呼ぶものゝ中に、習慣を容れて研究し、習慣の然る所以を洞見し了るの必要あ

るを信ず。

ドイツのハンセン Hanssen、マイツェン Meitzen、イギリスのシーボーム Seeböhm、ゴンメ Gomme の如き博学^{えいさい}の諸大家、鋭眼以て田舎の風俗を講究し、歴史、法律、人類、経済、言語学に関する研究をなし、猶ほ近時顕微鏡の学開けて細微の物を研究し、以て人類社会の事物にさへ推論し来れるが如く、地方学を発達せしめて、社会の細微的組織、即ち農村の講究を積むに従ひ、農業改良、信用組合、地方自治体、其他の団体に関することは論を俟たず、政治社会にまで少からざる形響を与へたり。近來至る所に於て「村是調査」と称するもの起り、あらゆる方面に興味津々たる材料を供給するは、吾人の殊に喜ぶところなり。

斯の如く将来農学の範囲は、如何に広大に赴くべきかは、今日殆んど想像し得べからざる所に於て、或は終に統一の便を欠き、農芸哲学、田舎文学、農民心理学等の如き、独立の諸科学を見んも計るべからざるなり³²⁾。

としている。新渡戸は農村における旧慣を見出すことによって、農村の歴史を研究し、それを将来に役立てていくことを提唱している。これは単に地方学の紹介にとどまるものではなく、自らの地方学の構想への道をたどるものとなる。

新渡戸は地方学を構想することによって、その研究対象を広げ、農学と農業との両立の可能性を探ろうとする。しかし学問上の位置付けでは、新渡戸の『農業本論』はマイツェンの単なる紹介とされ、村落地理学のひとつの業績として取り上げられることが多い³³⁾。確かに村落地理学としてとらえられ、後には人文地理学者の小田内通敏（1875-1954、以下は小田内）によって村落地理学として展開する（後述）が、新渡戸の意図は農学の対象範囲を広くして、地方学の確立という点にあった。しかし、この時点では地方学がそれほど強調されているわけではなく、新渡戸は農政学の確立を考えていたようである。新渡戸は『農業本論』で地方学の紹介をしたものの、その具体的な方法や研究内容、そして意図について詳しく語ることはなかった。新渡戸は『農業本論』の後半部を自ら要約して、「農業と社会生命との関係緊密なる所以を説述したり」³⁴⁾と語る。つまり農業と地域社会との関係をくわしく分析することが必要であり、これがこの時点で新渡戸の考える農政学であったといえる。

新渡戸は新しい学問のあり方を考える際に、上記の引用文中にもあるように、イギリスのシーボーム（Frederic Seeböhm, 1833-1912）などから大きな影響を受けている。シーボームから影響を受けている点は、主に三つある。一つは従来まで語られてこなかった歴史論の構築、二つは調査の対象としての非文献資料、とくに景観上の特色の重視、三つはその方法として「微視的考察」の実行などであった。シーボームは著書において、開放耕地制をはじめとする土地制度の歴史について詳細に説明し、マナー制と共有地あるいは農業の開放耕地制との関係について、経済史の視点から明らかにしている。いいかえれば、主に村落の歴史的な展開過程に焦点が当てられている³⁵⁾。

新渡戸はシーボームの研究に基づいて村落形態論を展開し、地方学の確立に役立てようとしている。これは「第六章 農業と人口」のなかの「村落の形態」で示される。新渡戸によれば、この村落研究こそが地方学を確立するひとつの方法であった。しかしヨーロッパの地方学と比べて、

翻って我国を察するに、春眠曉を覚えざるにや、斯学の呼声、寂寞聞くべからず。されば、僅か三十年以前に廃止せられたる封建制度の、社会形成の状況に就きても、智識徐ろに漸減せむとするの時運に際せるものゝ如し。今にして我が地方学の研究に尽瘁するなくむば、絶を紹ぎ廃を発するの効、復た収むべからざるものあらむとす。議論茲に至りて、余は大に斯学の必要を呼号せざるべからず、但本章の題目に拘せられ、本を離れ末に趣くを恐れて、意に任せずして止むを憾とす³⁶⁾。

と語る。ヨーロッパに比べてわが国では未だ地方学の研究に着手されていない。新渡戸はこの研究の必要性を訴える。新渡戸が展開した村落形態論は、必ずしも体系的なものではなかったが、わが国において先駆的に集落地理学的な記述を行なったものであったといえる³⁷⁾。

新渡戸は村落形態論の脈絡において、とくに日本の「田舎」の衰退に触れて、

夫れ田舎の衰へたる為め、国民の体格衰へ、兵力の強弱に影響したるの実例、古来甚だ多し。大都府の奢侈度なく、終に社会問題の欧米諸国に紛起せる今日に方り、尚ほ之を匡正するの道を講ぜずして、人力の及ばざる所と為す乎。人力の及ばざるは、真に及ばざるにあらず、及ばしめざるの原由存するを知らざるのみ。政權教育より諸般の快樂、皆之を都市に集収す、^{いづく}安むぞ田舎の衰頹を來たさざるを得んや。予を以て之を見れば、中央集權の制度を改めなば田舎の輓回は断じて人力の及ばざるものにあらず³⁸⁾。

と語り、都市へ資本や人口が集中する状況を、田舎（＝地方）の衰退ととらえ、中央集權的な制度が国力全体の衰微につながっていると批判する。新渡戸は田舎を国の活力の根本と考えて、都市の発達と地方の衰退を対立的な図式でとらえている。しかし田舎や農業を単に重視すればよいという偏った見方はしていない。

『農業本論』の骨子は農業を重視しつつ、しかし農業のみによって国家の発展はありえないというものであった。新渡戸は、

今や我国は將に農本國を脱却し、商工を以て經濟の國是となすの機運に近づかんとし、余も亦此現象を歡迎するの意あるは、本書を讀過せし諸子の夙に知悉せる所なるべし。是れ一見商工を重

んじ農を軽んずるが如くにして、農学者として其本分を尽さざる所有るが如しと雖、而も余は自ら之を以て農に不忠なるものと信ずる能はず、唯是れ農業よりも国家全体の経済発達の要あるを知り、農民よりも全国民の尊きを思ひ、農事よりも国事の重きを感じずるがために外ならず³⁹⁾。

と語る。つまり、一国の発展のために農本主義を脱却し、農業以外の商工業の発展が必要であるという。しかしそれによって農業が衰微して強兵の基礎が崩れてしまう。このゆえに農民は勤儉節約による自己修養や自己鍛錬をして、質実な強兵を養成しなければならない。それと同時に、国家の本となる農業は保護されなければならないという。

新渡戸はその後の言説においても、農工商の分業体制の確立が望ましいとする立場をとる一方で、農は商工業の基、農は国富の基というように農本主義的な側面もみせる。この分業体制を望ましいとする立場と農本主義的な考え方の中で、新渡戸は現実的な妥当性を模索している。そしてこの現実的な妥当性は地方^{ちかた}という枠組みを用意することで、ある程度まで可能となる（後述）。

新渡戸は現実の農業の衰退という状況をみている。しかし農民に一方的に勤儉貯蓄を強要していない。新渡戸は「されば勤儉を説きて、漫に農家の奢侈を叱するは、余りに同情なしといふべく、理の宜しき所にあらざるなり」⁴⁰⁾と述べて、貧困に対する救済を訴えている。新渡戸の農業観には、主に二つの特徴があった⁴¹⁾。一つは農民生活に対して、その貧困を問題視し、その救済を訴えるという、新渡戸の信仰とも結びついたヒューマニスティックな側面であり、もう一つは国家の繁栄と発展を願うナショナリストティックな側面である（もちろん、このナショナリズムは極端な国家主義を意味するものではない）。

『農業本論』の最後の章は「第十章 農業の貴重なる所以」である。経済学者の河上肇（1879-1946）は著書『日本尊農論』（読売新聞社、1905年）において新渡戸批判をしているが、とくにこの章を問題視している⁴²⁾。新渡戸の農政学には、多分にナショナリズムの色彩があったことは否めないが、その一方で零細農の救済に関心を寄せていたことも確かである。農業の大規模化ないし資本主義化という方向性を指向していたものの、この一方で小農の救済方法も考える。新渡戸はこの関心を具体化し、その救済方法を考えていこうとする。地方学はこの新渡戸の関心事の延長上にあった⁴³⁾。

新渡戸の『農業本論』を農政学としてみた場合、それは中途半端で常識的であったと評されることもある。しかしながら『農業本論』は、その後の台湾での糖業政策の着手（後述）や、さらに地方学の構想を通して、より具体性のあるものとなっていく。言論人として活躍した徳富蘇峰（1863-1957）は、1898（明治31）年に『農業本論』の書評を書いているが、そのなかで、

この冊子は著者によりて製造せられたりといわんよりも、むしろ「著者とともに成長したるもの」と称するを適當となすに似たり⁴⁴⁾。

と評している。『農業本論』は農政学としてみた場合であっても、前述のように新渡戸自身が農政学の前提としているように、未だその途上にあったといえるものである⁴⁵⁾。

4 台湾糖業政策の実施

新渡戸はその後、農政学の研究に携わったというよりも、实际的な植民政策の事業に従事した。新渡戸は1900（明治33）年に兄玉源太郎（1852-1906、以下は兄玉）台湾総督と後藤新平（1857-1929、以下は後藤）民政局長の要請を受けて、台湾総督府への赴任が決定する⁴⁶⁾。しかし直ちに赴任したのではなく、就任後の仕事の参考に資するためという理由で、約1年間の海外視察に赴く。新渡戸は台湾総督府囑託として、同年2月にアメリカを出発し、スペイン、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、バルカン諸国、エジプトをまわって、植民政策、とくに熱帯農業に関する諸施策の視察を行ない、翌01（明治34）年1月に帰国する。そして同年2月に台湾総督府技師として赴任し、5月には民政部殖産課長となる。

新渡戸が台湾に赴任する以前には、台湾総督府内では糖業振興政策をめぐる、意見の対立があった。すなわち急進的な大機械制工場の設立を進めようとする考え方と、小規模な製糖業（糖廊）から始めて、漸次大規模なものに移していくという漸進的な考え方との対立であった⁴⁷⁾。台湾糖業にとって、いずれの政策がよいのかという課題に応えることが、新渡戸の赴任要請の理由であった。

新渡戸に与えられた任務は、台湾糖業の振興政策を策定することであった。これに応じて、着任した年の9月に早くも兄玉台湾総督に『糖業改良意見書』⁴⁸⁾（以下は意見書）を提出している。短期間で提出した経緯について新渡戸は、

「能く調べて色々参考書を見てから意見書を書きます」と申しますと、「イヤそんな事は要らない。台湾のことの能くわからない内に書いて呉れ。君が台湾の実際を知ると、眼が瘠せて思ひ切った改良策が出なくなる。ジャワを見た眼の高い所で書いて呉れ。行はれない事でも何でも良いから、高い所を見た眼で書いて呉れ」と言はれました⁴⁹⁾。

と語っている。意見書の執筆にあたって、実情をできるだけとらえようとする姿勢よりも、理想を示したような意見書の執筆の方が求められたようである。もっとも後藤の統治方針では科学的調査に基づいていることを重視したので、実際の意見書は観念的なものではなく、実態に則したものとなり、しかも『農業発達史』や『農業本論』に比べて、はるかに論理的なものであった。

理想を示すようにという要請に、新渡戸が忠実に応えたとすれば、大機械制工場の設立という意見になってしまうことは十分に予想できる。しかしながら、実際に出された意見書の結論は、小規模な製糖業から始めて、徐々に大規模なものへと移っていくべきであるという意見であった。これは兄玉

や後藤とは異なり、台湾の農業形態や地域の特性を考慮に入れようとする新渡戸の視点が反映されたためである。この点で新渡戸は振興の主体本位の折衷主義よりも、状況本位の折衷主義を採っていることがわかる⁵⁰⁾。

新渡戸の意見書は、漸進的な移行を説く一方で、学理の応用と政府による保護を強調する。新渡戸は『農業本論』において、前述のように「未だ充分なる学理応用の期に至らざるものと謂ふことを得んか。農に於て学理の応用の困難なる」と記して、農業は学理の応用が困難な分野であると考えていた。しかし新渡戸は台湾という現場で技師となり、その学理を実際に応用する場に直面して、学理の応用が困難な分野であるからこそ、むしろ意見書において学理の応用を強調したといえる。

政府による保護も『農業本論』で強く主張されていた点であった。新渡戸は科学技術の力によって甘蔗栽培や製糖法の改良を図る一方で、政府が積極的な保護政策（直接的な補助金が重視される）をとれば、台湾の蔗糖はヨーロッパなどの甜菜糖に対抗できると強調する。新渡戸は科学と政府に期待し、それによって製糖業の改良発達が可能であると考えていた。そしてとりあえず実施可能な方策として、14項目をあげている。それは、

1 糖業奨励法の発布、2 臨時台湾糖務局官制の発布、3 糖務局支局を南部地方に設置すること、4 技術生の養成、5 技手を布哇に派遣し種苗を購入すること、6 八重山島および本島に栽培せらるる外国種を買収し種苗に供すること、7 台南地方に苗代を設けること、8 甘蔗試作場の設置、9 小圧搾機各種の購入およびその試験、10 産業組合の組織を促すこと、11 甘蔗栽培に適する新墾地の開拓を奨励すること、12 栽培法の改良に伴い水利開発を図ること、13 事業計画書を調整し資本家の参考に供すること、14 産糖地の状況に応じ大仕掛けの起業を勧むること⁵¹⁾。

であった。政府による保護と科学技術の応用によって、実施が容易であると考えられた項目があげられている。そしてこれらの項目は、もちろん小規模な製糖業（糖廊）から始めて、徐々に大規模なものへと移っていくべきであるという考え方に基づいたものである。

新渡戸は大工場の経営が可能となる条件が整備されるまで、従来の糖廊を改良して、製糖工程を合理化することによって「改良糖廊」を生み出し、徐々に規模を拡大していくという展開を考えている。しかしこの結果、糖廊が甘蔗栽培者となってしまう、単なる原料供給者となってしまうことによって、従来まで得ていた製糖利益が失われる可能性があった。実際の展開においても、製糖会社が有利となり、農民にはその利益が還元されることが少なかった⁵²⁾。これに対して新渡戸は蔗農による「糖業組合」の形成を説き、蔗農の利益を保護するように訴えている。しかしこの蔗農の保護のための組合構想は、ほとんど実現に至らなかった。

台湾では新渡戸の意見書に基づいて、具体的な糖業奨励政策が立案される。たとえば、1903（明

治 36) 年に甘蔗作場が設けられ、台湾全土に 4 ケ所の甘蔗苗園が置かれ、そこで種苗が育成された。また各地の老農を選んで模範蔗園を設けて、あるいは農民から優良な甘蔗の提供を受けて、その種苗を買い上げ、無償で希望者に下付した。こうして改良種の作付面積は年々増加している。甘蔗は 1905 (明治 38) 年頃までは在来種の方が圧倒的な割合であったが、翌 06 (明治 39) 年には、在来種と改良種の割合はほぼ同じとなり、1909 (明治 42) 年頃には改良種が全体の 85 パーセントを占めるようになった。奨励政策の提案が実現をみた成果であった⁵³⁾。

新渡戸の意見書に基づく糖業奨励政策は、総じて効果をもたらしたといえる。1901 (明治 34) 年から 1910 (明治 43) 年までの 10 年間に、甘蔗の作付面積は約 3.4 倍、収穫高は変動があったものの、約 3.7 倍に増加している。この増加にともなって製糖業の改良も進展し、同じ 10 年間で旧式糖廊数は 894 から 499 と半減する一方で、改良糖廊はまったくなかった状態から 74 まで増加している⁵⁴⁾。しかし新渡戸が糖業組合の設立を訴えて、蔗農の利益の保護を強調したにもかかわらず、新式工場の大資本が独占的地位を占めていたために、蔗農の利益の保護はできなかった。他にも新渡戸は蔗価の公定や甘蔗保険の設置など、蔗農の立場を保護する政策を訴えたが、いずれも採り上げられなかった。

新渡戸の意見書に基づく糖業奨励政策のその後の経過については、新渡戸自身が経済学研究会で報告し、この報告は『国家学会雑誌』に掲載されている⁵⁵⁾。そのなかで新渡戸は糖業を農業、工業、商業の順に検討して、今後においては商業的方面へ力を入れること、とくに海外輸出を重視すべきことを強調している。しかし新渡戸の訴えた糖業組合は実現をみることがなかったために、蔗農の利益が守られたとはいえないと述べている。

新渡戸の糖業発展の施策は効果をもたらしたといえるが、それだけでなく台湾では、樟脳・塩・アヘンの専売化や、ウーロン茶の生産に最新技術が導入されるなど、他の振興政策による経済的な進展もみられた。この結果、1904 (明治 37) 年以降、台湾は日本政府の補助金を必要としなくなった。台湾総督府はこの間に病院や学校などの施設を充実させ、日本人移住者に対しても、その恩恵をもたらしている⁵⁶⁾。

新渡戸は 1903 (明治 36) 年に臨時台湾糖務局長と京都帝国大学法科大学教授 (植民政策) を兼任することになる。しかし翌 04 (明治 37) 年には京都帝国大学の専任を命ぜられ、臨時台湾糖務局長を辞任している (もっとも 1906 (明治 39) 年まで総督府技師を兼任していたため、毎年一回は台湾へ渡っている)。新渡戸は台湾での糖業政策に従事する一方で、大学の教授職に就くことになる。新渡戸は京都帝国大学で植民政策を講義することになるが、これがわが国で初めての大学における植民政策の講義となった⁵⁷⁾。

しかし植民政策の講義は、厳密にいうと、このときが最初ではない。日本で初めて植民政策の講座を設けたのは札幌農学校であった。札幌農学校では 1891 (明治 24) 年に佐藤昌介 (1856-1939、

以下は佐藤⁵⁸⁾によって、この講座が担当されたが、1894（明治27）年度の講義から佐藤にかわって新渡戸が受けもつようになった。しかし、このときの新渡戸が受けもった植民政策の講座は、経済理論の講座のひとつとされ、J.S. ミルを中心とする古典的自由主義の思想家などを扱った教材が使われていた⁵⁹⁾。したがって新渡戸が京都帝国大学で行なった植民政策とは、かなり趣を異にしていたといえる。

新渡戸が京都帝国大学で講義した植民政策論は、土地利用に重点が置かれていた。それはアメリカの社会思想家であるヘンリー・ジョージ（Henry George, 1839-1897）の土地論（私的所有を基礎にして、土地は人間の共有財産であるという考え方）に影響を受けたものであった。しかしヘンリー・ジョージの土地国有論に対比する形で、新渡戸は自身の説を展開している。

ヘンリー・ジョージ氏は世界土地共有論（Internationalization of Land）を主張すべし。抑々土地は天与の賜物にして国籍の区別を問はず人種の差別を論ぜず人類の為に最もよく利用する者に帰す。（尤もかくいひたればとて国家の領土権を排するの要なし。）広漠なる原野を有しながら之を利用せずして徒に雑草の生茂るに委するは独り天の意に背くのみならず又人類一般に対する罪科なりとの議論の行はるる日必ず来るべし。

之を要するに植民最終の目的即地球の人化と人類の最高発展とを実現するには少くとも土地に就きては世界社会主義の実現を要すべし。（中略）即ち土地を最もよく利用する者、或る意味に於ては土地を最も深く愛する者こそ土地の主となるべけれ⁶⁰⁾。

と語っている。新渡戸は土地に関して世界共有社会主義という名のイデオロギーを唱えている。この考え方は旧約聖書詩篇二四篇一節の「地とそれに充つるもの、世界とその中にすむものとは、皆主のものなり」に基づいている⁶¹⁾。つまり新渡戸はヘンリー・ジョージと同様に、キリスト教の影響を受けて土地論を展開していたが、ヘンリー・ジョージと異なるのは、所有だけでなく、その利用に重点がおかれ、利用主体こそ土地所有者にふさわしいという点であった。

新渡戸の植民理想ともいうべき、土地利用者が土地所有をするという考え方は、後に土地利用と人間生活が結びつけられることによって、地方学へと結実していく。しかし新渡戸の植民理想は、帝国主義的な思想に利用されやすいという側面をもっていたことも確かである。しかし欧米列強の侵略に対抗するという意味ももち、一概に帝国主義的な思想とはいえない側面ももっていた。新渡戸自身は「植民とは大体に於いては優等なる人種が劣等なる人種の土地を取ることであり⁶²⁾」と語り、帝国主義的な侵略を意味しないとして、自分自身の学説は多くの学説と異なっていることを表明している。しかし実質的には土地利用（天然資源の利用なども含む）に関わって、侵略が進んでいったことを考えると、実際には新渡戸の意図通りにはならなかった。

新渡戸の植民政策の講義では、日本の植民地支配への批判が多くみられる。新渡戸はいくつかの批判点をあげているが、たとえば、大学の設立などによって文明の発展をめざそうとする志が低いこと、原住民のために尽くす「公の良心」が欠落していることなどをあげている。さらに日本による同化政策を非難して、「植民政策の原理は、(中略)強いて一言にして言へば、原住民の利益を重んずべしといふことであろう」⁶³⁾と結んでいる。この点から原住民の風俗習慣に干渉しないことを強調している。これは後の地方学の構想において、前述の土地利用と結びついて地域住民の生活習慣を調査すべきであるという考え方へとつながっていく。

新渡戸が講義した後のことになるが、大学で植民政策を講義した人物に矢内原忠雄(1893-1961、以下は矢内原)がいる。矢内原も台湾の統治政策を問題にしている。1920(大正9)年に植民政策講座の担当者として東京帝国大学経済学部招かれた矢内原は、後藤による台湾統治政策の特徴を産業開発主義にあると規定している⁶⁴⁾。矢内原は植民地への日本人移民は必要としているものの、それは社会的経済的活動として実質をともなったものでなければならないと考える。台湾への移民の失敗は、形のための自作農移民であって、台湾の食料自給をめざしたものではなく、台湾人に対する民族的対抗や民族的融和を意図した政治的意義が重視された結果であったとしている⁶⁵⁾。

矢内原も新渡戸と同様、同化政策に対して批判的であり、矢内原によれば、世界的な植民統治政策は従属主義から同化主義と自主主義へと転換し、さらに同化主義から自主主義へと推移しつつあるという⁶⁶⁾。しかし矢内原の場合は、日本の政策がすでに同化主義に転換していたため、それへの批判的観点から同化主義を特徴づけ、その批判を明確にするために自主主義を好ましいものと位置付けているにすぎない。矢内原は後藤の統治政策を「生物学的政治」と名付けて、同化主義に転換する以前の政策ととらえる。生物学的政治は現地対応・非干渉主義、旧慣尊重、非同化主義という特徴をもち、矢内原は進歩的であると評価する一方で、台湾社会の特異性の認識が専制政治の基礎にもなったという側面をもっていたと批判している⁶⁷⁾。

植民政策(学)は第二次世界大戦後に消滅することになるが、その後、国際経済論という名称に変更して再発足している。さらに世界では植民地という地域がほぼ無くなろうとしている今日、帝国主義的な思想がまったく消え去ったとはいえない。新渡戸の発想が、どのような展開をみせているのか、検証が必要とされている⁶⁸⁾。また新渡戸だけでなく、矢内原がキリスト教徒であったことから、欧米における植民や開拓の考えには、キリスト教の布教という精神が核となっていたことは明らかである⁶⁹⁾。したがって台湾や満洲などの開拓を見据えた教育の背景に、キリスト教があったことは注目すべき点であったといえる。

新渡戸の植民政策は『農業本論』と同様に、体系化されたものではない。植民に関する学説を百科事典風に紹介したものであるといえる⁷⁰⁾。新渡戸は農政学にしても植民政策にしても、こういった特徴をもっているが故に、地方ないし地域^{ちかた}という枠組みを用意したとも考えられる。地方という枠組み

のなかで、風俗習慣などの諸現象を分類し、体系性をもたせようとしたようであった。

5 地方学の確立に向けて

新渡戸は1906（明治39）年に第一高等学校の校長に任命される。東京帝国大学教授との兼任であったが、新渡戸の教育方針は、それまでの経験を通して得られた考え方が反映されていた。当時の一高の気風は、「籠城主義」とよばれ、エリート主義に凝り固まって社会との接点をもたないことが、むしろ美風のように考えられていた。新渡戸の教育方針は、こうした学生の精神的籠城を解いて、学生間の友情、社会との交流、さらに国際間の友好という開かれた世界に学生を導くことであった⁷¹⁾。この新渡戸の姿勢は、その後、地方学の構想へとつながっていくことになり、それは学生（主に中央官僚となる）教育にも反映される（後述）。

新渡戸が地方学の具体的な展開を語ったのは、第一高等学校の校長となった翌07（明治40）年2月14日に開催された中央報徳会の例会であった。この例会における講演で初めて「地方の研究」⁷²⁾が公にされた。著書『農業本論』において地方学が紹介されて以来、台湾糖業政策の実施を体験して、地方学はかなり具体性を帯びたものとなった。もちろん新渡戸が第一高等学校で示した教育方針は、地方学の紹介と結びついている。

新渡戸は、地方の研究について、

少し此日本の材料を蒐めましても、材料の出所は多く地方何々といふ書物から出て居りますからして、地方の事を研究するといふ考で申上げるのであります。

地方といふのは、無論土地といふものに最も関係は近い。けれども唯地面といふことではない。土地に直接関係のある農業なり制度なり其他百般のことを含んで地方の研究といふのである⁷³⁾。

と語る。新渡戸が提唱した地方学とは、簡単にいえば、地方の歴史、文化、風俗習慣を研究し、都市にはない農村の良さを発見することによって、地方の活力を高める必要性を説いたものであった。具体的な研究内容として、地名、家屋の建築法、村落の形態、土地の分割法、言語・方言の五つがとり上げられ、旧家の記録、村鏡、水帳、明細帳などを学術的に利用し、各地方の古書などを学術的な方法で編集することなどが説かれた。これは今日の民俗学の骨格に通じるものであり、地方学や地方史研究の先駆けといえるものであった⁷⁴⁾。

新渡戸が地方学を構想するにあたって強調した点は、『農業本論』において紹介したシーボームの村落研究をさらに展開させて、中央と地方、外来と土着の対置において、それぞれ前者の歴史論や文化論を相対化して、後者の重要性を指摘することであった。つまり、中央に残る文献史料によって構成された歴史論や文化論と、地方に残る文献史料や非文献史料によって構成された歴史論や文化論を

対置させて、地方の重要性を強調することである。新渡戸は都市や中央の歴史論や文化論を無視するものではないが、地方を都市や中央に対するアンチテーゼと捉え、さらに地方を外来文化や近代文明に対置される「地に根ざした文化」や土着的な思想や文化の拠点として位置付けた⁷⁵⁾。新渡戸がこのように地方を強調する目的は、地方学が農村の救済という実践性を内包した経世済民の学となることをめざしていたからであった。

新渡戸は『農業本論』における零細農の救済の強調、台湾糖業政策における蔗農の利益の確保、植民政策の講義における原住民の利益への配慮など、一貫して農村ないし農民の救済という目的を掲げてきた。この農村の救済という点では、柳田の農政学と類似性をもっていた。柳田の場合には農政学から民俗学への展開でみられたように、その方法論の整備が強調され、「協同と自助の精神」という共同意識の育成が主な目的となっていた⁷⁶⁾。柳田は新渡戸によって提起された地方学のひとつの方向性を展開したといえる。

新渡戸の地方学は農村の救済という目的をもっていたが、この目的を達成するために、その元々の発想となった中央対地方、都市対農村という対置のなかで、農村を徹頭徹尾、調べればよいというものではなかった。これだけでは新渡戸は農村という枠内でとどまってしまうと考えたようである。新渡戸は地方^{ちかた}を研究すれば、広がりをもって国全体のあり方、さらには人類史の展開まで理解できるようになるという。これについて新渡戸は、

自分の力に及ぶ小さなものを研究して、それを伸ばしさへすれば、大きなことに応用が出来るといふ議論で、アダムス先生はお前達は亜米利加の憲法或は行政を調べやうとするならば、先づ小さな村なり郡なりを調べよといふて奨励する⁷⁷⁾。

ということから学んだと語る⁷⁸⁾。新渡戸によれば、国家の政治や経済、さらに帝国主義などについてわかろうとすれば、一郡や一村について空間的にも時間的にも、徹底的に調べる必要があるという。そして一郡や一村を調べることから、国や世界のことを知ることができるという。

新渡戸は外国の事例を引き合いに出して、地方学の必要性を説いているが、国内において類似のものに、二宮尊徳（1787-1856、以下は尊徳）による農村復興仕法の調査がある。新渡戸の「地方の研究」の講演が、まさに中央報徳会の例会で行なわれていることが示しているように、尊徳の農村復興仕法の考え方は、新渡戸の地方学の考え方と類似であった。尊徳による農村復興は、対象となる農村の徹底的な調査から始める。しかも過去 200 年ぐらいをさかのぼって、現存する史料をすべて洗い出している⁷⁹⁾。おそらく江戸期以降において、尊徳の調査ほど徹底的に行なわれたものは、他に見当たらない。尊徳の場合、国家のあり方を考えるという点は見当たらないが、その視点は新渡戸に通ずるものをもっていた。

新渡戸の講演では地方学の一般論から各論へと進んでいく。その研究の第一に「氏名」「地名」の研究をあげ、第二に「家屋の建築様式」をあげ、第三に「村の形」をあげる。さらに第四に「土地分割」をあげ、第五に「言語・唄」をあげる。新渡戸によれば、これらの研究対象が国民的慣習であるという。そしてこの国民的慣習こそが「国体」であるという。新渡戸の考える国体とは、神秘的な意味合いのものではなく、経験主義的ないし習慣尊重的な意味合いのものであった⁸⁰⁾。それぞれの国では、その歴史のなかで特殊な国民的習慣が構築され、それは変化しにくいものである。日本の国体もその一種であった。新渡戸は、

今日、日本の国体は、どう見ても説明が出来ないからといって、それは日本の国体に理屈がないのではない。吾々の頭が、十分これを噛砕くだけの力がないからである。何故かくいふかとなれば、現に、二千年続いたといふファクトが、ここにある。嘘でも何でもなく、ちゃんとここにあるのである。先づこのファクトをアクセプトしなければならない。それを自分の聞齧りの、しかも西洋で出来た言葉などで、説明が出来ないからとて、そのものが合理的でないとか、学問的でないとかいふことは、これこそ頗る危険思想である⁸¹⁾。

と語る。新渡戸は地方学で捉えることのできる慣習を、国家レベルの抽象概念にまで高めようとする。

これと同様の考え方は、新渡戸の著書『武士道』⁸²⁾にみられる。周知のように『武士道』はイギリスの保守主義者エドマンド・バーク（Edmund Burke, 1729-1797）の影響によって執筆されているが、新渡戸は『武士道』の書き出しで、

バークは、武士道のヨーロッパにおける原型である騎士道の、すでに顧みられることのない棺に、感動的な賛辞をあたえたが、いま私は彼の言葉をもって、この問題を考察することに、大いなる喜びを感じている。

と書いている。新渡戸はバークの影響のもとに国体を考えているが、その元になっているのは地方学における国民的慣習であった⁸³⁾。

6 郷土会と諸科学の形成

新渡戸は地方学の方向性について、

此田舎に対する趣味を増すことを養成するといふことは、政略ではない。今の自治体を良くしようとか、或は教育上必要であるからといふ、其目的を達するの方便としてのみではない。研究の

材料として私は大変趣味のあることゝ思ふ。学問として大変面白い意味があると思ふ。殊に余り人のやつて居ない学問であるから、少しやると直き大家になれる。今の所では斯ういふ学問はないやうであるが、私の^{ちかた}地方の研究といふことに就て申すのは、之を科学的に研究することが出来ることゝ思ふ⁸⁴⁾。

と語る。地方の研究はほとんど着手されていない、少し手をつけると大家になれる学問であるという。そして科学的に研究することによって、地方学の確立の可能性がある。新渡戸のいう地方学は、やがて郷土の研究へと展開し、その体系化がめざされ、それと同時に民俗学や集落地理学の形成のきっかけを与える⁸⁵⁾。

柳田民俗学は、明治 30 年代に始まった明治国家の「地方」への関心と運動の体験に基づいて形成されていた。この形成に大きな影響を与えたのが新渡戸である。新渡戸による地方学の提唱と、そこから出発した「郷土会」での研究が、柳田民俗学の学問的個性を与えることになる。柳田の回想によれば、

「郷土会」のもとになったのが「郷土研究会」といふ集りで、明治四十年か四十一年ごろ、私の家で始めたものである。そこへ新渡戸博士が西洋から帰つて来られたので、後には新渡戸先生のお宅に伺ふやうになつたが、中心はやはり「郷土研究会」からの連中であつた⁸⁶⁾。

という展開であつた。この回想によれば、柳田が始めていた研究に、新渡戸の西洋流の^{ちかた}地方研究が加わったということである。

新渡戸は地方の研究と郷土の研究について、後に回顧して、

『農業本論』なる一書を世に公にして、『^{チカタ}地方』の研究を唱導したのは、既に卅年以前のことであつた。其頃は郷土なる語が今日の如く学問の対象として行はれてゐなかつたから、我輩は昔より伝へ来つた『地方』なる文字を借りて、今日の郷土の意味に用ひたのであつた。而して我輩の望んだことは、郷土の地理的観察は勿論のこと、歴史の研究、現代社会的の調査、殊に経済、即ち生活、及び物産等に関する考察を唱導したのであつた⁸⁷⁾。

と語っている。新渡戸は「郷土」という言葉が学問的な共通語として用いられていなかったのも、伝統的な地方という言葉を使ったという。新渡戸は地方と郷土に、それほど大きな差異を見出していなかったようである。

一方、当時の柳田は内務省主導の地方改良運動で行なわれていた「町村是」運動が画一主義に陥っ

ていることを厳しく批判していた⁸⁸⁾。柳田は、

中央政府に使はれて居る専門家は学者としても一えらい、其監督を受くる下級官庁は学説に於ても受売をして居れば比較的安心であります。しかし農業経済の学問などは最も中央集権には適しておりませぬ。それも人手があり余って手分けをして各方面を精査し得るならともかくも、五人や八人の東京の専門家がこの細長い日本の隅々にまで行き届いた観察と判断を下し得るはずがありません⁸⁹⁾。

と語る。中央集権的な政策に批判的であった柳田にとって、郷土の特性を研究しようとする新渡戸の地方学には、共鳴する点が多かったはずである。

新渡戸と柳田の二人の橋渡しをしたのが、新渡戸によれば、人文地理学者の小田内であり、柳田によれば、農政官僚の石黒忠篤（1884-1960、以下は石黒）であった⁹⁰⁾。新渡戸は小田内との出会いについて、

小田内君が始めて自分を小石川の宅に訪れられたのは、明治三十五六年頃だと記憶する。其の時に、君は『農業本論』を読んで地理学の研究上何か啓発することがあつたから、今後時々相談相手に成つて呉れといふ意味の話があつた。自分は地理学の知識はないが、農業の立場から地理にも興味を持つてゐる旨を述べ、却て同君より啓発の道を開かれんことを望んだ⁹¹⁾。

と語る。さらに新渡戸の自宅で郷土会を開くようになった経緯にも触れて、

自分の宅で郷土会を開くやうになつたのも、君の発意から柳田君などに相談したのがもとであつたと記憶する。この会合は地理学者ばかりの集りといふのではなく、各種の専門家が、夫々の立場から土地と生活との交渉を明にしようといふ目的で話合つてゐたから、この会合は君の目ざしてゐる村落の地理学的研究に豊かな見解を与へるよい機会になつたと思ふ⁹²⁾。

と語る。郷土会では土地と生活、あるいはその両者の関係という点が、大きなテーマとなっていた。

柳田は新渡戸の地方学の提唱に影響を受け、新渡戸を主催者とする郷土会を、柳田自身を幹事役として発足させる⁹³⁾。郷土会は1910（明治43）年に設立されているが、これは新渡戸の地方学における考え方を実証しようとするものであった。新渡戸によれば、郷土会は「土地と生活との交渉を明らかにしようという目的」⁹⁴⁾で議論をする場であった。その中心メンバーは小田内、石黒をはじめとして、那須皓（1888-1984、以下は那須）、正木助次郎（1868-1912）、小野武夫（1883-1949）、牧口

常三郎（1871-1944）らであった。

この郷土会において新渡戸の果たした役割を、小田内は以下のように評している。

明治末期に於て、郷土的研究の重要性を感じたわたくしは、ドイツ文学の専攻から地理学に転じた中目覚氏によつて、ドイツのハイマートクンデ（郷土学）を知り、その萌芽を新渡戸稲造先生の『農業本論』に見出したのであった。かくて当時いまだ殆んど顧みられなかった「郷土学」に対し、「郷土会」の創設によつて僅かにその渴を癒した。自然科学的考察と文化科学的考察との綜合によつて始めて達成さるべき郷土的研究方法の苗床としてのわが郷土会は、その役割を果たすために各方面の学者を網羅するにつとめた。しかしそれが「心からの集ひ」であるべきために、人柄のよき人達をメンバーとする心構が必要であり、またあらゆる問題が話題として出て来ることに對して、常に即妙のデスカッションがなされなければならない必要が生じた。かかる会合に對して、わが新渡戸先生は実によりき先導者であり、先生の好意によつて食事を共にしつつ語り合ふことになつたわが郷土会は、会員各自に郷土的な物の見方を与へたばかりではなく、日本の郷土学の史的発達の上に、全く黎明期たる働をなし得た。しかし、イズムをつくることを好まれなかつた先生の風格と身邊の多忙なことは、この郷土会を組織化して郷土学を樹立すべき役割を果たすまでに至らなかつたことは、斯学の学的要請が必然的になつて來た今日、実に惜しみて余りあることである⁹⁵⁾。

と後年、回顧している。郷土会は様々な専門の学者が集まって議論する場となり、新渡戸の役割は、そのまとめ役であった。しかし小田内によれば、新渡戸は特定の思想や考え方によって郷土会を組織することを嫌つたために、郷土学として体系化するまでには至らなかつた。

新渡戸が郷土会を自宅で始めるようになった理由は、実際に農政に携わっている柳田らの意見を聞いてみたいという希望をもっていたからであった⁹⁶⁾。実際に郷土会の参加者には、柳田や石黒らをはじめとして、農政学あるいは農業経済学を専門とする人が多かつた。郷土会での報告も、たとえば石黒「豊後の由布村」（第19回報告）、小田内「大山及び三峰の村組織」（第20回報告）、那須「代々木村の今昔」（第29回報告）、新渡戸「櫻島罹災民の新部落」（第35回報告）、尾佐竹猛「伊豆新島の話」（第39回報告）、中山太郎「富士講の話」（第39回報告）などであり、各地の農村の調査報告が多かつた⁹⁷⁾。郷土会での報告を概観すると、おおよそ三つの傾向に分類できる⁹⁸⁾。すなわち、(1)村落共同体における地域住民のまとまりについて、地人相関的な視点から把握しようとする研究、(2)社会変動的な視点から、村落生活を構成しようとした研究、(3)民俗誌的な観点から、村落生活における習俗を位置付けようとする研究であった。学問的には農政学や農業経済学にとどまるものではなく、今日の農村社会学や、農民生活に関心を寄せる民俗学に及ぶようなものであった。厳密に言えば、こ

の時点で民俗学は未だ成立していなかったので、民俗学に接近するようなものであった。

しかし新渡戸は郷土会を通して、必ずしも学問の確立をめざしたわけではなかったようである。柳田によれば、この郷土会では、

話題のもとには会員各自の旅行の報告で、いちばん熱心だったのは早稲田大学の小田内通敏君であった。小田内君を私に紹介したのは、やはり早稲田の人で、国木田独歩の友人とかきいてゐた。ことによると牧口君が連れて来たのかも知れない。小田内君の関係で一人、二人会員になった人があつたが、とにかくさういふ人たちが全部新渡戸先生の方へ移つたのである⁹⁹⁾。

という状況であった。郷土会での発表は、旅行の報告程度のものであり、柳田がめざすような学問の確立という方向性をもっていなかった。新渡戸は郷土会を、お互いに郷土に関する多方面の知識を自由に交換できるサロン（あるいはサークル）のようなものと位置付けたかったようである¹⁰⁰⁾。ちょうど著書『農業本論』が農政学的前提であると語っていたように、郷土会は郷土学（新渡戸によれば地方学）の前提として位置付けていたのかもしれない。

新渡戸自身は、この郷土会で二回の報告を行なっている。一回は「三本木村興立の話」であり、もう一回は前述の「櫻島罹災民の新部落」であった。新渡戸はこのなかで日本の家屋の構造が普遍的なものかどうかをめぐって、柳田と議論している¹⁰¹⁾。新渡戸の発表は単に各農村の紹介にとどまるものではなかった。新渡戸が『農業本論』で示したような零細農の救済という面が強く出ており、小農民の生活を安定させるには、どのようにすればよいのかが、発表の底流となっていた。新渡戸自身の問題意識は、膨張する都市に対して解体する農村という視点から、農村救済という側面が強かった。新渡戸の郷土研究の意図はこの点にあり、これが地方研究の目的と考えていた。新渡戸は農村救済にとって農村改良は不可欠であると考えているが、それは地方の習俗をはじめとする生活実態に即した「地に根ざしたもの」とならなければならないと考えていた。その地方の生活実態の把握こそ、地方学の根本的な点であり、郷土会の研究目的としていた点であった。

新渡戸の考えに應えるかのように、1913（大正2）年に柳田によって『郷土研究』誌が創刊される。柳田は郷土会と『郷土研究』誌の関係について、「郷土会はやがて郷土研究を出す母胎となり、今日の民俗学会の基礎となつて来た」¹⁰²⁾と語っている。さらに『郷土研究』誌に引き続き、1925（大正14）年には『民族』誌、1935（昭和10）年には『民間伝承』誌が創刊される。柳田は『郷土研究』誌の創刊によって本格的な郷土研究を始めている。柳田は郷土会において農業政策に関する論考や報告をする一方で、『郷土研究』誌の創刊をきっかけにして「巫女考」「毛坊主考」などの民俗学的な論考を発表するようになる¹⁰³⁾。

柳田は『郷土研究』誌上において、農業政策に関する論考の展開と民俗学的な論考の展開とは両立

していると考えていた。しかしそこに学問的な混乱があると指摘される。その指摘は、博物学者・民俗学者の南方熊楠（1867-1941、以下は熊楠）によってなされる。柳田は1913（大正2）年6月22日に熊楠宛の書簡において、『郷土研究』誌について、

最初の考えにては、世間の思わくは構わず勝手至極の雑誌にするつもりなりしも、五百でも六百でも読者があり、かつすでに共同研究の自由壇場たることを表榜せし上は、やはり読者通有の趣味にも随わざるべからず。ことに高木君はその専門にはまった雑誌とも申し得るも、小生は十五年来の学問主として日本の田園経済を講明するにあり。今日すでに同志の友人より幾分横道にそれたりと批難せられ候折ゆえ、忙しき中で雑誌でも出せばこれは道楽で専門はこの外にとも申し得ず。たとい自分で書かぬまでも今少しエコノミイの方面の材料を紹介せねばならず、かつまた郷土研究の範囲如何を問う人に対して、この一、二年の間はなるだけ広くわたりて問題の及ぶところを示さんと思うために、どうしても題目の変化を多くせねばならず¹⁰⁴⁾。

と書いている。文中の高木とは、『郷土研究』誌の創刊に、柳田とともに加わった神話学者の高木敏夫（1876-1922、以下は高木）のことである。この書簡では柳田は自分の専門を「田園経済」、つまり新渡戸の地方学を含んだ農政学を想定している。柳田は郷土会のメンバーから農政学や地方学から逸脱しているのではないかと指摘され、『郷土研究』誌には「エコノミイ」の題材を入れなければならないと苦しい言い訳をしている。

さらに熊楠が『郷土研究』誌は民俗学の雑誌であると認識していたことに対して、柳田は、翌14（大正3）年5月12日の熊楠宛の書簡において、

かの雑誌は民俗学のための雑誌のようたびたび仰せられ候には迷惑仕り候。前回幾度も刊行の趣旨を申し上げしことあり。小生専門はルーラル・エコノミーにして、民俗学は余分の道楽に候。かつ雑誌は田舎の好学の徒をして地方研究の一般の趣味を感じしむるにあり。故に雑駁なるは致し方なきのみならず、小生同学の郷土会員のごときは、むしろ糞土の臭気の不足なるを批難しおるくらいに候¹⁰⁵⁾。

と書いている。柳田は自分の専門は「ルーラル・エコノミー」であり、民俗学は道楽であると言い切っている。これに対して、熊楠はルーラル・エコノミーを「地方経済学」と和訳した上で、『郷土研究』誌において、

しかるにこの地方経済学の分限、小生には分からず。地方成立の研究と言わば、これに伴いて必

ず地方政治学研究の必要あり。かの神社合祀の利害また地方によろず利益事業を計画する利害のごときは、もっともこの雑誌にて論ずべきものなり。（中略）産業の変改、地境の分割、市村の設置、水利道路の改全、衛生事業、またことには地方有利の天然物を論ぜざるべからず。しかるに小生気がつかぬゆえか、地方経済云々を主眼とする『郷土研究』に、従来何たる地方経済らしき論文の出でしを見ず。ただ俳人の紀行にして俳句を抜き去りたるがごときもの二、三を見しのみ¹⁰⁶⁾。

と記している。熊楠がいう地方経済学は、新渡戸の地方学とほぼ同一である。地方学は農村救済の学としての側面が強いので、ここでいう地方経済学的な要素が入るのは、いわば当然であるといえる。

この熊楠の批判に対して、柳田は『郷土研究』誌上において、ルーラル・エコノミーを地方経済あるいは地方経済学などと和訳されるのは本意ではないと述べた上で、

もし強いて和訳するならば農村生活誌とでもして貰いたかった。何となれば記者が志は政策方針や事業適否の論から立ち離れて、単に状況の記述闡明のみをもってこの雑誌の任務としたいからです。この語が結局議論の元ですからくどく言います。エコノミイだから経済と訳したと言えはそれまでですが、経済にも記述の方面があるにかかわらず、今の地方経済という用語は例の改良論の方をのみ言うようで誤解の種です。あるいはルーラル・エコノミーでも狭きに失したのかも知れぬ。新渡戸博士のようにルリオロジーとかルリオグラフィーとでも言った方がよかったかも知れませぬ¹⁰⁷⁾。

と記している。柳田は、ルーラル・エコノミーについて地方経済学ではなく農村生活誌という意味であると反論する。そしてルーラル・エコノミーよりも、新渡戸のいうルリオロジー、つまり地方学としたほうがよかったかもしれないと語る。柳田は郷土研究の中心に「生活」を考えているということなので、これはまったく新渡戸の地方学そのものであった。

郷土研究に関して柳田と熊楠の間で交わされた議論は、柳田が農政学を展開するつもりであるといったことから混乱をもたらしたが、結局、新渡戸が提唱した地方学を柳田と熊楠が確認するという結果となった。柳田は農政学の延長上にあるという点と、民俗学への関心の高まりという点を両立させるために農村生活誌という表現を使ったといえる。

この一方で『郷土研究』誌の創刊に加わった高木は、創刊号の巻頭論文において、郷土研究の目的を、以下のように書いている。高木は、

郷土研究の目的は、日本民族生活のすべての根本的研究であるから、この民族生活の舞台であり、

同時にその発展の要件である郷土すなわち土地の研究は、この研究の必須要件である。土地の研究は、土地そのものの研究ではなく、民族の郷土としての土地、民族生活を左右し、且つ左右される土地、換言すれば民族生活に対して相互作用の關係に立つ土地の研究でなければならぬ¹⁰⁸⁾。

と語る。高木は単一民族史観に基づいて日本民族の郷土というとらえ方をしているが、土地と生活との交渉を明らかにしようとする新渡戸の意図も反映されていた。

しかし高木は、雑誌創刊の1年後の1914（大正3）年に編集から手を引いている。『郷土研究』誌の編集をめぐる対立が原因であった。根本的には雑誌に対する考え方の違いがあった。前述の熊楠宛の書簡のなかにみられるように、高木は研究者向けのアカデミックな雑誌をめざしていたのに対して、柳田は地方の知的青年層や教員などを対象とした啓蒙的な雑誌を考えていた。この他にも高木と柳田が決別する要因はあったようであるが、郷土研究という新たな研究分野に対する考え方に大きな違いがあったようである¹⁰⁹⁾。

『郷土研究』誌の創刊は、結局、日本民俗学会の結成へのきっかけとなるものの、これは新渡戸のめざした地方学ではなかった¹¹⁰⁾。柳田は、この雑誌を毎月刊行しているだけでなく、自らも論文や随筆などを170編余も投稿している。取り扱ったテーマは広範に及んでいるが、主に地名研究、民間信仰研究、山人・妖怪研究、郷土研究の方法論など、民俗学が抱える課題をほぼ網羅したものであった。これらの柳田の民俗学的な研究は、柳田のいう農村生活誌に関わっているもので、新渡戸の地方学が、そのきっかけであったことはまちがいない。しかし地方学が意図した方向とは明らかに異なっていた。柳田には熊楠のいうルール・エコノミーは入っていない。柳田は新渡戸の地方学の示唆を受けて、民俗的な関心を強くしたが、新渡戸の地方学も柳田の民俗学も、農政学の延長という共通点をもつために、その影響度は強かった。しかし柳田の論文や随筆には「経済」的な考察はほぼ見当たらない。

もっとも新渡戸と柳田で基本的な認識において異なっている点もある。たとえば新渡戸と柳田では、都市と農村に対して基本的な認識の違いがある。つまり前述のように新渡戸は農村救済の学を提唱していたのに対して、柳田は都市と農村との関係を有機的に結ばれる存在としてとらえ、それぞれの並存を考えていた¹¹¹⁾。新渡戸は地方の研究によって解明される地方の独自の文化的歴史的特性と、地方土着の思想によって、都会人や中央人に対置することを企図していたのに対して、柳田の場合には、郷土の研究は「郷民」自身の自覚あるいは覚醒のために行なうものと位置付けていた¹¹²⁾。新渡戸は郷土会での発表を行なっているにもかかわらず、地方学については、まったくといってよいほど言及していない。おそらく新渡戸と柳田の構想が交錯あるいは合致するなかで、柳田による民俗学のなかに新渡戸の地方学が包摂されていったからであろう。新渡戸は地方学の形成および発展を、柳田の民俗学に委ねたといえる¹¹³⁾。

このような柳田の民俗学への展開があったが、その一方で郷土会の参加者の関心に応じて、地方学は分化していった。たとえば、郷土地理学、集落地理学、社会政策学、農業政策学、農業経済学、農村史、農民史、農村社会学などである。もっとも地方学は必ずしも一般的な科学における分化という展開とはいえない。なぜなら科学は分化する場合に、その体系性あるいは系統をもっている（体系性が崩れる場合もある）が、地方学の場合には、元々、体系性は欠落していたので、分化したとは必ずしもいえないからである。

たとえば、小田内は新渡戸の『農業本論』に触発され、集落地理学研究を志向している。小田内は『農業本論』によって、

農業を媒体として自然と人間生活との関係を洞察する眼を開き得た。かくて当時の地理学的研究の方向が動もすれば自然地理的に偏向するか、または空疎な「地人相関」なる標語の下に自然現象と人文現象の羅列に終始していた弊害から脱却することが出来た。（中略）『農業本論』の中にドイツの村々の形態が図説してあったので、「地人相関」の抽象論よりも、具体的な新しい学問として興味をもち、「村」を対象にする方がよいと思った¹¹⁴⁾。

と語っている。つまり小田内は『農業本論』に触れることによって、自然地理学的な傾向を脱し、あるいは現象の網羅的な収集にしか過ぎなかった地理学から脱して、新たに人文地理学への展開を見出したという。しかも、それは村落を対象とすることで、より具体性をもったものとして構築できるのではないかと考えたという。

前述の柳田の郷土会に関する感想にもあるように、郷土会の参加者で最も熱心であったのは小田内であった。小田内にとって郷土会は「目ざしてゐる村落の地理学的研究に豊かな見解を与へるよい機会になった」¹¹⁵⁾と考えられる。小田内自身も回顧しているように、小田内の人文地理学には、新渡戸の影響が色濃く出ている¹¹⁶⁾。小田内は1913（大正2）年に著書『我が国土』を刊行しているが、そのなかには新渡戸の影響による地理学や地理教育に関する特徴がみられる。それは、(1)臨地調査の成果が多い。(2)郷土地理・地方地理の研究を提唱している。(3)大都市近郊の農村・農民・農業に強い関心を示している（おそらく当時、最も変化の激しい地域に注目した結果であったと考えられる）¹¹⁷⁾。(4)農村の人口の疎密とその自然的・経済的要因を述べている。(5)朝鮮・台湾・樺太などの「新国土」を植民地支配者の目でみている、という特徴であった¹¹⁸⁾。

小田内は地理学においても、郷土あるいは都市や農村の研究を促進すべきであると説いている。とくに各地域での臨地研究の必要性は、『農業本論』から影響を受けたものであり、郷土会活動のなかでヨーロッパの研究に触れることによって育まれたものであった。これは小田内の地理学に独自性を与え、たとえば著書『帝都と近郊』（大倉研究所、1918年）という成果となって現れる。この著書

は新渡戸の影響を受け、地域地理学を住民の生業や生活に即して研究しようとしたものであり、その独自性は主に二つある。一つは自作農や小作農の問題、あるいは農地の売買問題などに言及するという社会地理学的な視点に立っていた点である¹¹⁹⁾。もう一つは、都心を中心とする同心円で、蔬菜を栽培する農業地帯をえがくなど、チューネン（Johann Heinrich von Thünen, 1783-1850）のモデルを念頭においたような経済地理学的な研究をしている点である。さらに農産物市場などにも言及し、交通機関の発達や住宅地の拡大が影響を与えていることを説明する¹²⁰⁾。チューネンのモデルは、すでに『農業本論』でも紹介されており、小田内は『農業本論』からそれを知ったと考えられる。

小田内の研究成果は集落地理学上の業績として評価されることが多いものの、当時の自然地理に重点を置く主流の地理学においては、ほとんど反響がなかった。さらに歴史地理学の分野からは批判があった。これに対して小田内は、歴史地理学的な研究を軽視していたわけではなく、むしろ当時の小田内は毎年1〜2週間にわたって京都へ赴き、小川琢治（1870-1941、以下は小川）から村落研究（『和名抄』の郷土地理学的考証）に関する示唆を受け、東洋史学の内藤湖南（1866-1934）や国史・経済史の内田銀蔵（1872-1919）との談話からも啓発を受けていた¹²¹⁾。

小田内は日本だけでなく、朝鮮・満洲・樺太の各地においても精力的に現地調査を行なう一方で、1914（大正3）年に『都市と村落』を編集し、1922（大正11）年から1925（大正14）年にかけて早稲田大学で集落地理研究会を開催している¹²²⁾。小田内は集落研究の組織化を図り、この研究会は計10回開催されている。

さらに小田内は1926（昭和元）年に人文地理学会（慶應義塾大学図書館に事務局を置く）を設立している。これは1924（大正13）年に小川を中心に設立された地球学団（本部は京都帝国大学理学部地質学教室）や、翌25（大正14）年に山崎直方（1870-1929）を中心に設立された日本地理学会（本部は東京帝国大学理学部地理学教室）を意識したものであった。しかし小田内の人文地理学は、主流となっていた自然科学的な地理学とは大きく異なっていたので、その広がりを見せなかった。

7 郷土研究と地方学

郷土会の活動を通して、小田内は人文地理学の確立を、そして柳田は民俗学の確立をめざした。新渡戸による地方学の構想は様々な広がりを見せるが、主に小田内の人文地理学として、あるいは柳田の民俗学として展開を見せる。小田内は郷土や地域の特性や個性を追求することを、自らの人文地理学の目標においた。これに対して柳田は郷土会のあり方に不満をもち、郷土研究を総合的な学問として位置付け、その総論として民間伝承論や民俗学の確立をめざした。柳田は郷土の個性を追求することではなく、むしろそれらを貫く一般性や共通性を追及する科学研究をめざした。科学の方法論からいえば、小田内は個性記述的な人文科学の方法をとったのに対して、柳田は法則定立的な自然科学的な方法をとったといえる¹²³⁾。

柳田は明治期から大正期にかけて編纂ないし出版されていた多くの郷土誌（郡誌、村誌など）類に対して不満を抱いていた。国家の歴史の在り方を、そのまま郡や村の郷土誌に適応しているだけであると批判し、文書史料として残されることが稀な郷土の日々の生活について調査研究することの重要性を訴えた¹²⁴⁾。この生活の調査研究とは、新渡戸による「地方の研究」そのものであり、郷土の全体像を土地と人間生活との結びつきとして調査研究することを意味した。

柳田や小田内をはじめとする10人ほどの郷土会会員は、1918（大正7）年8月に10日間ほどにわたって、神奈川県久井郡内郷村で調査を行なっている。これがわが国における専門家による村落調査の嚆矢として知られている。しかし準備不足などもあり、満足な調査とはならなかった。この結果について柳田は、

非常に面白かつたけれども、我々の内郷村行きは学問上先づ失敗でありました。面白かつたとは言ひ得ますが、有益であつたとは申しにくい。其失敗の原因は至つて単純で、勿論我々の怠惰不熱心の為ではない。一言を以て言へば、問題が多岐に失して順序と統一の無かつたこと、学び得る事は何でも学ぼうとした其態度が悪かつたのです¹²⁵⁾。

という評価を下している。

そしてこの調査報告書の刊行をめぐる、柳田と小田内は対立する。刊行することを主張する小田内に対して、柳田は調査の失敗の原因として、問題が多方面にわたって総花的になってしまっていること、何でも関係があると考えて、それを取り入れようとした姿勢に問題があったとして、調査報告書の刊行に反対した（小田内は内郷村の調査時に、前述の著書『帝都と近郊』を刊行している）。結局、調査報告書は刊行されず、この内郷村の調査報告書の刊行をめぐる対立が、郷土会が消滅する要因のひとつとなった。

柳田は調査研究には「順序と統一」が必要であることを強調し、「郷土研究に総論の必要になつて来たこと、ジレッタントの集合が専門家の代用になりにくいことなど、此会合の為に次第に痛切に感ぜられたのも、亦一個の副産物と見ることができる」という。しかし柳田は調査研究によって郷土研究という学問（たとえば郷土学）が確立されるとは考えていない。柳田は、「郷土研究といふ語が、何か専門の一つの学科の如く世間から考へられるやうになると、私たちは多少の責任を感じる」と語っているように、郷土研究が専門的な学問と混同されることに注意を促している。そして郷土研究が始まったことについて、「主たる動機は、何か新しい方法を以て、今後は地方の研究をしなければならぬといふ心持ちから出て居ると思ふ。（中略）名は郷土研究と称して、到底我々の承認し得ない方法を以て、地方の前代を研究しようとする人もあるから困るのである」¹²⁶⁾と語る。柳田によれば、郷土研究とは小さく区画した個々の地方を単位とした考察方法ということになる。つまり「郷土を研究

する」のではなく、「郷土で或るものを研究する」¹²⁷⁾ということになる。

柳田は自らの学問を科学として位置付けようとするので、科学成立の要件である共通性、普遍性、法則性を強調する¹²⁸⁾。したがって郷土研究という方法による地方の研究は、各地方の枠で閉じられるものではなく、地方研究が広く全国に開かれ、各地方の比較によって「ある事実ある法則」に到達しなければならない。比較を行わなければならないので、郷土研究は実地研究を分担して行なうものとなる。すなわち郷土誌とは郷土のために郷土を知ることを、それだけで独立したものと説く人もいるが、そうではないという。柳田は各郷土を独立の対象として、その成果である郷土の民間伝承(民俗)を研究の最終目的とすることに反対している。柳田のいう郷土研究は、単一の郷土のみを研究することではない¹²⁹⁾。

しかし、そうであるからといって、柳田にとって郷土は法則を見出すための単なる材料にすぎないということでもない。その根底には、郷土会における郷土研究の考え方がある。つまり新渡戸の地方学の考え方が強く反映されている。柳田は、

我々が個々の郷土を以て研究の目的物とする場合に、最初に出現して来る問題は、人と天然との
 久しい間の交渉、それが如何なる変化を生活様式の上に及ぼして居たかといふことである。それ
 を明白にするのを職分とする学問の、尊重せらるべきは論無きことで、知識の総合といふ我々の
 大事業も、結局は其基礎を爰に置くことになるわけである¹³⁰⁾。

と語る。郷土を研究するということは、人間と土地の交渉の研究であり、それが総合的な郷土研究の基礎となる。柳田は郷土会時代から郷土研究に総合的な学問を期待していた。この学問は郷土の総体をとらえる総論でなければならない。しかし柳田は郷土会での寄せ集めの方法では、総論を構築することは不可能であると感じていた。

柳田は小田内の郷土研究に対して厳しい批判を加える。郷土会は内郷村調査のあと、1919(大正8)年3月に新渡戸が国際連盟の次長としてジュネーヴへ赴任することになり、その求心力を失って、自然消滅の形で終息する¹³¹⁾。郷土会の運営は新渡戸の属人的な結びつきに大きく依存していたために、新渡戸の不在とともに郷土会は解消される(同年12月には柳田が貴族院書記官長を辞任しているので、1919(大正8)年は新渡戸だけでなく、柳田の身辺にも変動が起こった年でもあった)。もっとも1927(昭和2)年の新渡戸の帰国にともない、小田内を中心に郷土会が再興されている。しかし、これには柳田は参加していない。再興された郷土会は、小田内の考え方に基づいて運営され、昭和期の郷土研究や郷土教育と結びついていくことになる。

小田内は文部省囑託として、1930(昭和5)年に文部省が師範学校を対象に始める郷土教育(運動)に深く関わる。小田内の郷土に対する関心は地理教育から出発していた。小田内にとって郷土と

は、むら、まちなどの共同生活を営む身の回りの生活圏であったが、この意味で小田内にとって郷土研究とは、郷土地理研究とほぼ等しいものであった。郷土を認識することが、小田内の郷土研究（郷土地理）の目的となった。そしてこの郷土の認識が国土の認識に至ると考えるのが、新渡戸の地方学の考え方であったが、小田内もこの新渡戸の考え方に共鳴していた。したがって小田内にとって郷土自体が研究の目的となった。この一方で柳田は郷土を研究の方法であると考えていたので、両者の考え方の違いは明白であった。

さらに小田内は、郷土は国土ないし世界の一部であり、郷土研究は国家的ないし国際的視点で行なわなければならないと考えている¹³²⁾。しかし小田内には、郷土から国土へ、さらに国際的な規模で考えていくにしても、その間の論理的な説明に欠けている。柳田の場合には、それは各郷土の調査研究の成果を総合・比較することによって、論理的な説明をしようとしている。小田内には柳田のいう総合性が欠け落ちてしまっている。この結果、小田内の郷土研究は、当時の農村窮乏や疲弊に対する教育的対症療法にすぎないものになってしまう。

小田内は文部省が進める郷土教育の裏付けとして、郷土研究の必要性を強調した。それが1935（昭和10）年から始まる「総合的郷土研究に基く郷土教育」であり、この小田内のもとで推進された郷土研究の成果が『総合郷土研究』誌となった¹³³⁾。この郷土教育および郷土研究に対して、柳田は厳しい批判を行なう。前述のように、柳田は郷土研究の方法に問題があるという。柳田は、

文部省系統の人々が唱導せられる所謂郷土研究事業には、各自の郷土の事情を明らかにするを以て、一旦の目的達成と観る風が見えた¹³⁴⁾。

と語る。つまり文部省の郷土研究や小田内の郷土研究では、各郷土それ自体が目的とされているので、これを教育にもち込めば、個々人は自分自身の郷土のことしか知らないということになってしまう。柳田によれば、共通性や普遍性を理解してはじめて、自分自身の郷土の特徴を知ることができるというのである。

柳田は『民間伝承論』の刊行後、その研究対象を小さな郷土から、その集合体としての「日本といふ大郷土」へと拡大している¹³⁵⁾。郷土というローカルな空間に生きていた人々が、より大きなナショナルな空間に躊躇なく参入していく。この場合に柳田は学問として確立する最終目標として、「国としてより賢明に、社会として疑問を解決していく」ことを掲げる。この目標を達成することによって、独自の郷土意識を保ちつつ、ネイションという均一な主体へとスムーズに移行できるというのである¹³⁶⁾。しかしながら柳田が求めた郷土研究は、柳田の意図とは異なり、国家政策の下請けの学問と化してしまう危険性をもつことになってしまう¹³⁷⁾。

ところで新渡戸の地方学は、小田内や柳田が展開した学問と大きく異なる点をもっていた。それは

地方学が「自治制度を全うする」ことに最も効用があるとしていた点である。新渡戸は『農業本論』において、すでに地方自治制度論を展開していたが、そのなかで新渡戸が説く「完美なる自治制」とは地方の名望家による地方自治を前提としていた¹³⁸⁾。この地方自治論に現れているように、新渡戸の地方学はパースナリズム（私的関係主義）に陥る傾向があった。これが新渡戸の教育活動を通じて、官僚制度の内部に入り込んでいる。官僚制度にパースナリズムがもちこまれるとき、それは官僚派閥の哲学の基礎となってしまう。日本の伝統的な思想の多くが、思想をパースナルな面においてとらえることに習練をつんできているが、まさに新渡戸のパースナリズムは、それを反映したものであったといえる。内村鑑三（1861-1930）は新渡戸について「博識であり、細目については多くの妥当な判断をくださるが、全体としてのまとまりはなく、結論に個性がない」と評している。この批評は新渡戸に向けられたものであるとはいえ、官僚派閥の思想を的確に表現している。ここに「新渡戸を原型とする日本の官僚的自由主義」¹³⁹⁾の形成があり、この思想は戦前期の日本の官僚制を形成する上で、大きな役割を果たすことになる。

実際に新渡戸の門下から、多くの社会派官僚が誕生している。新渡戸は第一高等学校の校長であった時に、現今の「智、徳、体の三育を以て理想とし方針とするが如き」教育は「人間を部分的ならしむるのみ」と批判し、「今の教育に欠くるものは、実に此の社交的觀念にあらずや」として“Sociality”を養成する教育の必要性を指摘し、「円満に実世界に活動し得る人間」「全体としての人間」の育成にあたるべきであると語る¹⁴⁰⁾。新渡戸は学生に対して社会に出て積極的に働きかけていくことを説く一方で、その際の心がけとして“to be”すなわち内省的態度を以て臨むことを強調する。

新渡戸から自我の内面的人格の成長と、社会・国家の発展の調和を思想的課題とするように学んだ一高生の多くは、東京帝国大学法科大学法学科ないし政治学科へと進学する。もちろんその後は、官界への道を進んだ学生が多かった。たとえば、前田多門（1884-1962、内務省、以下は前田）、藤井武（1888-1930、内務省）、河合榮治郎（1891-1944、農商務省、以下は河合）、南原繁（1889-1974、内務省、以下は南原）、三谷隆信（1892-1985、内務省から外務省）、関口孝（1889-1956、台湾総督府）、膳桂之助（1887-1951、農商務省）、川西實三（1889-1978、内務省）らである¹⁴¹⁾。

前田は、当時の新渡戸の教えを、

新渡戸先生が、当時一高校長としてのみならず、それこそ、当代随一の社会教育家として、機会ある毎に強調せられたのは、縦の関係の外に、横の関係の重視すべきこと、即ち、水平的に、各人が相寄り相携へて、善き社会を作らねばならぬ。日本人の教養にこれまで欠けて居り、こん後涵養の急務なるを感ずるのは、社会性（ソーシアリチイ）であり社会奉仕であるといふ点であった¹⁴²⁾。

と回想している。新渡戸は社会との関わりを重視し、一高生に対して、内部に閉じこもり、独特なエリート意識やプライドを涵養してきた籠城主義の欠点を指摘した¹⁴³⁾。またそれと同時に、あらゆる社会的権威を認めず内面的な成長にこだわる哲学者・作家の阿部次郎（1883-1959）や評論家の魚住折蘆（1883-1910）らの抽象的な個人主義も批判した。

東大卒業後に官界へ入った河合の場合には、この新渡戸の考え方に忠実にしがったといえる¹⁴⁴⁾。しかし、前述の官僚派閥の思想の問題点と同様に、個人の自立を涵養するような品性を、どのように陶冶するのかという問題が、新渡戸が負った根本的な問題であった¹⁴⁵⁾。そして、この問題は地方学が抱えた問題にも通ずるものであった。河合と同様に南原の場合も、官界を去って研究者の道に入ることになるが、その研究者を志す際にも、新渡戸の影響が色濃くみられた。この点で新渡戸が負った問題点は、そのまま河合にも南原にも受け継がれることになる¹⁴⁶⁾。河合は哲学や思想を、南原は政治哲学を志すことになるが、それぞれの分野で、新渡戸が地方学で直面した問題と同様の問題に突き当たることになる。

新渡戸は最晩年の約2年間、産業組合中央会岩手支会長に就任している。1931（昭和6）年に就任しているが、当時、支会長は知事兼任が一般的であったので、新渡戸は異色であった¹⁴⁷⁾。しかも名誉職ではなく、新渡戸は実際に郷土を訪れ、県内をまわって、とくに小学校で児童と話し合い、農村内で農民と言葉を交わしている。そして実現はしなかったものの、質の高い医療を受けられる施設を建設しようとした。新渡戸はあたかも郷土研究の実践に取り組んだかのようにであった。新渡戸は『農業本論』において、地方自治の要件として、「行政の局に参する者は、公益の爲め、名誉職即ち無給に勤むること」¹⁴⁸⁾と語っている。新渡戸は在村地主イデオロギーを重視するというものではないが、地方行政は名望家が無給で行なうべきであるという考えをもっていた。実際に第二次世界大戦前までは、地方官吏については新渡戸のいう名誉職的な位置付けが継承されていた。この意味で新渡戸は地方行政やその担い手の先駆者であったといえなくもない。しかし、その一方で新渡戸の地方自治は、属人性ゆえの限界をもっていたのである¹⁴⁹⁾。

8 結 語

新渡戸は基本的に教育者としての生涯を送ったといえるが、その教育者（研究者）としての出発点は、農業教育であり農政学であった。しかし農政学が出発点であったとはいえ、その後は、ほとんど農政学にとどまることなく、郷土研究や地方学へと目を向けている。

この郷土研究や地方学を構想する上で、新渡戸がもっていた考え方には、大きく四つの特徴がある。一つは近代的合理主義的な考え方である。これは具体的には、アメリカ流のプロテスタンティズムの影響のもとで、資本主義化を肯定する考え方である。二つはキリスト教信仰に基づくヒューマニスティックな関心の強さである。これは農村の貧困問題に寄せる関心の強さとなって現れる。三つはナショナ

リスティックな要素である。これは国家的な繁栄を重視する立場を意味しており、偏狭な国家主義とは異なる。この特徴は新渡戸が日本的な特質に強い関心を持ち、さらに商工業の発展に対する国家の施策に協調的な姿勢を示している点に現れている。四つは現実主義的な考え方に基づいて議論が組み立てられているという点である。新渡戸の地方学は、これらの特徴に基づいて構想されたものであった。

しかし新渡戸の地方学は、これらの特徴をもっていたからといって、当時の地方論や農政学と際立った違いがあったというわけではない。なぜなら四つの特徴は新渡戸の場合には、徹底したものではなかったからである。たとえば農業経済論としては、社会学的な要素や心理学的な要素、あるいは宗教的な要素まで入り込んでいるので、農業経済論として高い評価を受けているものではない。しかしながら、新渡戸の複眼的ともいえる視点は、他に例をみない。つまり幅広い視点で事象をとらえているという点では、高い評価が得られるであろう。この複眼的な視点が地方学に生かされたと考えられる。

新渡戸の地方学が、わが国の農業ないし農村研究に果たした役割は決して大きいものではない。それは新渡戸の地方学が体系立てられたものではなかったことに由来すると同時に、当時の農業研究が未だ地方学を受け入れるほどには広範に組み立てられたものではなかったからである。しかしながら新渡戸の地方学は、日本の農業ないし農村の分析にそれほど貢献しなかったものの、自らの植民論や国際関係論での考察をふまえたものであり、地方学で示された包括性は、国際社会において十分に生かされるものであったのではないだろうか。新渡戸は周知のように国際連盟で活躍し、日米間の関係改善に尽力している¹⁵⁰⁾。新渡戸の地方学は国際社会での活躍という脈絡で考えられるといえるのかもしれない。

新渡戸における国際関係の基礎は、人間関係のそれと同様に、道義であった。新渡戸は国際協調の必要性を強調し、国際的視野での Sociality（社交主義）を説いている。新渡戸の社交主義は人間同士の相互関係の重要性を強調したものであった¹⁵¹⁾。新渡戸の思想はアメリカのプラグマティズムやドイツの歴史学派の影響を受けた結果であるが、社交主義を強調する点で新渡戸の国際主義と石橋湛山（1884-1973）の小日本主義とは類似である。もっとも新渡戸の場合は、利益よりも道義に重点をおくものであったのに対して、石橋のそれは道義よりも利益に、しかも長期的に考えられた利益に基礎をおくものであったといえる¹⁵²⁾。いずれにしても、今後の国際関係を考える場合の重要な示唆を与えているといえる。

注

- 1) 拙稿「報徳主義思想の展開と国家政策の課題——京都における地方改良運動を通して」(『京都産業大学論集人文科学系列』第31号、2004年、56～77ページ)。
- 2) 芳賀登『地方史の思想』、日本放送出版協会、1972年、66～74ページ。
- 3) それぞれめざす点は、福沢が「大日本」、新渡戸が「国際日本」、夏目が「小日本」であった。船曳建夫『「日本人論」再考』、講談社学術文庫、2010年、31～2ページ。
- 4) ここではひとつずつ研究成果をあげないが、本文中で引用あるいは参照した著書や論文である。
- 5) 新渡戸の経歴については、須知徳平『新渡戸稲造の生涯』、熊谷印刷出版部、1983年；花井等『国際人 新渡戸稲造——武士道とキリスト教』、広池学園出版部、1994年。
- 6) 当時の『武士道』に関する位置付けについては、船津明生「明治期の武士道についての一考察——新渡戸稲造『武士道』を中心に」(『言葉と文化』、第4号、2003年、17～32ページ)；平川祐弘「西洋にさらされた日本人の主張——新渡戸稲造の『武士道』」(『大手前大学人文科学部論集』、第4号、2003年、73～101ページ)。
- 7) 松隈俊子『新渡戸稲造』、みすず書房、1969年、67～77ページ。
- 8) 新渡戸稲造『農業本論』(明治大正農政経済名著集7)、農山漁村文化協会、1976年、31ページ。
- 9) このような考えに至るまでの経緯については、近藤真弓「新渡戸稲造研究(1)——札幌農学校への道」(『盛岡大学短期大学部紀要』、第12巻、141～53ページ)。
- 10) 新渡戸稲造「宮部金吾宛書簡、1884年4月20日」(新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第22巻、教文館、1986年、237～8ページ)。以下では『新渡戸稲造全集』は『全集』と略す(編者と出版社も略す)。
- 11) 潮木守一『アメリカの大学』、講談社学術文庫、1993年；コンラート・ヤーラオシュ編/望月幸男・安原義仁・橋本伸也監訳『高等教育の変貌 1860-1930——拡張・多様化・機会開放・専門職化』、昭和堂、2000年；F. ルドルフ著/阿部美哉・阿部温子訳『アメリカ大学史』、玉川大学出版部、2003年。
- 12) 和泉庫四郎「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」(『鳥大農研報』、第38号、1985年、82～91ページ)。
- 13) 新渡戸稲造「学生時代のウイルソン」(『中央公論』、1917年3月号)。
- 14) Taylor, Henry C. and A.D., *The Story of Agricultural Economics in the United States, 1840-1932*, Greenwood Press, 1952, pp. 80-98. 当時の農業経済学の状態については、拙稿「イギリス農業経済学の形成とプロフェッションの誕生」(『京都産業大学論集社会科学系列』第21号、2004年、57～90ページ)；拙稿「20世紀前期におけるイギリス農業経済学の展開とプロフェッション」(『京都産業大学論集社会科学系列』第23号、2006年、41～71ページ)。
- 15) 新渡戸稲造「宮部金吾宛書簡、1885年11月13日」(『全集』第22巻、1986年、257ページ)。
- 16) 新渡戸稲造『内観外望』(『全集』第6巻、1969年、235ページ)。
- 17) 和泉庫四郎「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究Ⅰ. 佐藤昌介・新渡戸稲造のアメリカ留学時代の履修記録」(『鳥大農研報』、第35号、1983年、85～95ページ)；大樫敬史「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証的研究：ジョンズ・ホプキンス大学所蔵文書の分析を中心として」(『北海道大学大学院教育学研究科紀要』、第101号、2007年、55～67ページ)。イリーは1881(明治14)年から1886(明治19)年にかけてアメリカの社会問題、社会思想、社会主義

などに関する多くの論文を発表している。当時のドイツ新歴史学派については、ベルトラン・シェフォー
ルト著／塘茂樹訳「ドイツ歴史学派 ― 倫理感とその進歩への信頼」（住谷一彦・八木紀一郎編『歴史
学派の世界』、日本経済評論社、1998 年、95～118 ページ）。新渡戸はウィルソン（Thomas
Woodrow Wilson, 1856-1924、後に第 28 代アメリカ合衆国大統領）から話をきいて、イリーの経済
学は独創性に欠けると考えていた。

- 18) 新渡戸稲造「読書と人生」（鈴木範久編『新渡戸稲造論集』、岩波文庫、2007 年、178～82 ページ）。
- 19) 田村信一「歴史学派」（田村信一・原田哲史編著『ドイツ経済思想史』、八千代出版、2009 年、108～16
ページ）。
- 20) 新渡戸稲造著・滝沢義郎訳『日本土地制度論』（『全集』第 21 巻、1986 年、5～150 ページ）。
- 21) 新渡戸稲造著・松下菊人訳『日米関係史』（『全集』第 17 巻、1985 年、463～526 ページ）。
- 22) 同上書、521 ページ。
- 23) 新渡戸稲造『日本文化の講義』（『全集』第 19 巻、1985 年、311 ページ）。
- 24) 鶴沼裕子「新渡戸稲造のアメリカ観とクエーカー主義」（『聖学院大学論叢』、第 16 巻 2 号、1～10 ペー
ジ）。
- 25) 新渡戸稲造『農業発達史』（『全集』第 2 巻、1969 年、549～50 ページ）。
- 26) 同上書、686～7 ページ。
- 27) 新渡戸稲造「ハーバート・B・アダムズ宛書簡、1899 年 2 月 11 日」（『全集』第 22 巻、1986 年、367
ページ）。
- 28) 新渡戸稲造、前掲書、1976 年、34 ページ。
- 29) 東畑精一「新渡戸博士と Ruriology」（『全集』別巻 2、2001 年、277～8 ページ）。
- 30) 新渡戸稲造、前掲書、1976 年、137～8 ページ。
- 31) 同上書、99 ページ。
- 32) 同上書、113 ページ。
- 33) Takeuchi, K. and Nozawa, H., Recent Trends in Studies on the History of Geographical Thought
in Japan: Mainly on the History of Japanese Geographical Thought, *Geographical Review of Japan*,
61B-1 (1988), pp. 59-73. 新渡戸はマイツェンから直接学んでいるので、一般的に『農業本論』はマ
イツェンの紹介とされるが、紹介している箇所はきわめて少ない。
- 34) 新渡戸稲造、前掲書、1976 年、441 ページ。
- 35) Seebohm, Frederic, *The English Village Community examined in its relations to the manorial and
tribal systems and to the common or open field system of husbandry, an essay in economic history*,
Longmans, 1913. イギリスではこの業績以降、風景には、その地域の社会構造や歴史が反映されて
いるという考え方が展開している。W.G. ホスキンス著／柴田忠作訳『景観の歴史学』、東海大学出版会、
2008 年。
- 36) 新渡戸稲造、前掲書、1976 年、235～6 ページ。
- 37) 関戸明子「新渡戸稲造の「地方学」とその村落研究の思想」（『奈良女子大学文学部研究年報』、第 34
号、1990 年、68～88 ページ）。
- 38) 新渡戸稲造、前掲書、1976 年、274 ページ。
- 39) 同上書、491 ページ。

- 40) 同上書、321 ページ。
- 41) 蓮見音彦「新渡戸博士の農業論」（東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』、春秋社、1969 年、303～25 ページ）。
- 42) 住谷一彦「新渡戸稲造と河上肇——日本農政学の系譜」（『環』、vol. 40、2010 年、200～13 ページ）。
- 43) 北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」（大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地 4 統合と支配の論理』、岩波書店、1993 年、179～203 ページ）によれば、このために新渡戸の農政論は中途半端で常識的であったために、地方学という農業社会学的なものへと傾斜していったという。
- 44) 徳富蘇峰「書評『農業本論』（『国民新聞』、1898 年 9 月 18 日）；東畑精一「新渡戸稲造」（中山伊知郎編『経済学大辞典』第 3 巻、1955 年、309 ページ）。
- 45) 住谷一彦によれば、山田盛太郎（1897-1980）は著書『武士道』が新渡戸農政学の基本構造を示していると高く評価していた。住谷一彦、前掲論文、2010 年、203～6 ページ。
- 46) 丸川哲史『台湾ナショナリズム——東アジア近代のアポリア』（講談社選書メチエ、2010 年、31～5 ページ）によれば、児玉と後藤は「特別統治主義」をとり、植民地経営を内地の法体系とは別個に、総督府による「政令」を中心とした統治方法と採っていた。これによって台湾の植民地経営が日本国家による直接的な管理・運営の対象ととらえられていなかった。
- 47) 台湾では 1900（明治 33）年に、鈴木藤三郎（1855-1913）らの出資によって、資本金 100 万円の大会社である台湾製糖株式会社が設立されていた。拙稿「明治期日本の実業家と報徳思想——鈴木藤三郎の荒地開発主義」（王秀文編『日本企業文化と異文化コミュニケーション』、世界知識出版社、2009 年、54～68 ページ）。
- 48) 新渡戸稲造『糖業改良意見書』（『全集』第 4 巻、1969 年、169～226 ページ）。
- 49) 鶴見祐輔『後藤新平 第二巻』、勁草書房、1966 年、283～4 ページ。
- 50) 鶴見俊輔「日本の折衷主義——新渡戸稲造論」（伊藤整・清水幾太郎編『近代日本思想史講座Ⅲ』、筑摩書房、1960 年、183～222 ページ）。
- 51) 新渡戸稲造『糖業改良意見書』（『全集』第 4 巻、1969 年、220～6 ページ）。
- 52) 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』、岩波書店、1988 年、227～65 ページ）。
- 53) 黄昭堂『台湾総督府』、教育社、1981 年、79～82 ページ。
- 54) 山根幸夫「台湾糖業政策と新渡戸稲造」（東京女子大学新渡戸稲造研究会編、前掲書、1969 年、279～88 ページ）。
- 55) 新渡戸稲造「台湾に於ける糖業奨励の成績と将来」（『国家学会雑誌』、第 24 巻 4 号、1910 年；『全集』第 4 巻、1969 年、227～49 ページ）。
- 56) ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造——国際主義の開拓者』、中央大学出版部、1992 年、84～9 ページ）。
- 57) 台湾でのつながりによって、新渡戸は後に 1917（大正 6）年から 1922（大正 11）年まで拓殖大学学監の職に就いている。拓殖大学の当時の学長は後藤であり、植民事業に従事する人材の養成を掲げていた。草原克豪『近代日本の世界体験——新渡戸稲造の志と拓殖の精神』、小学館スクウェア、2004 年、83～91 ページ。
- 58) 佐藤は札幌農学校の存続に果たした役割が大きく、また札幌農学校の帝国大学への昇格に尽力した。拙稿「明治初期の高等農業教育とその定着要因——京都農牧学校の設立と展開を通して」（『京都産業大学論集人文科学系列』第 29 号、2002 年、72～102 ページ）。

- 59) 田中慎一「新渡戸稲造と朝鮮」(『季刊 三千里』、第34号、1983年、90ページ)。
- 60) 『全集』4巻、371ページ。
- 61) 佐藤全弘『新渡戸稲造の世界 ― 人と思想と働き』、教文館、1998年、208～216ページ。
- 62) 新渡戸稲造『植民政策講義』(『全集』第4巻、1969年、139ページ)。
- 63) 同上書、165～7ページ。
- 64) 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』(矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第2巻、岩波書店、1963年、180ページ)。
- 65) 同上書、326～31ページ。
- 66) 村上勝彦「矢内原忠雄における植民論と植民政策」(大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地4 ― 統合と支配の論理』、岩波書店、1993年、219～27ページ)。
- 67) 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』(矢内原忠雄、前掲書、1963年、372ページ)。
- 68) 小嶋山ルイ「新渡戸稲造再考 ― 「帝国主義者」の輪郭」(『思想』、第1018号、2009年、121～49ページ)。
- 69) 船曳建夫、前掲書、2010年、58～62ページ。
- 70) 北岡伸一(前掲論文、1993年、179～203ページ)によれば、この新渡戸の幅広さは、新渡戸による概念の精緻化が粗っぽいことに由来する。この点はアカデミックなスタイルを重視し、概念の厳密さを求めたために学問を自縄自縛に陥らせた矢内原と好対照であるという。
- 71) 太田原高昭「内村鑑三と新渡戸稲造」(『高等教育ジャーナル』、第10号、2002年、133～41ページ)。
- 72) 新渡戸稲造「地方の研究」(『斯民』、第2編2号、1907年、1～20ページ)。
- 73) 同上論文、1ページ。
- 74) 地方学は明治期の地方論あるいは地方自治論の流れとは異なる。明治期の地方論については、たとえば村松玄太「明治初期地方論研究序説 ― 福沢諭吉の地方観を中心に」(『政治学研究論集』、第13号、2001年、73～88ページ)。
- 75) 鶴野祐介「柳田国男における〈郷土〉概念の形成 ― 新渡戸稲造の〈地方(ヂカタ)〉概念の受容と「転回」 ―」(『京都大学教育学部紀要』、第37号、1991年、221～4ページ)。
- 76) 拙稿「柳田国男の農政学の展開 ― 産業組合と報徳社をめぐる」(『京都産業大学論集社会科学系列』、第27号、2010年、83～125ページ)。
- 77) 新渡戸稲造、前掲論文、1907年、9ページ。
- 78) この視点は、後年の柳田の著書『北小浦民俗誌』(1949年)の研究方法来に反映されている。
- 79) 拙稿「二宮尊徳における農業思想の形成」(『農林業問題研究』、第19巻1号、1983年、28～36ページ)。
- 80) 鶴見俊輔、前掲論文、1960年、204ページ。
- 81) 新渡戸稲造『内観外望』(『全集』第6巻、1969年、231ページ)。
- 82) 新渡戸稲造著・矢内原忠雄訳『武士道』(改版)、岩波文庫、1974年。
- 83) パークの思想に強い影響を受けたのは、新渡戸をはじめ金子堅太郎(1853-1942)や柳田などであった。この点で西欧に類似の保守主義の系譜が、わが国にも存在していたことがわかる。この保守主義の系譜のなかで、明治期におけるわが国の農政学が誕生した。原洋之介『「農」をどう捉えるか ― 市場原理主義と農業経済原論』、書籍工房早山、2006年、80～3ページ。

- 84) 新渡戸稲造、前掲論文、1907 年、8 ページ。
- 85) 地方学から民俗学への方向性については、後藤総一郎「地方学の形成」（児玉幸多・林英夫・芳賀登編『地方史の思想と視点』、柏書房、1976 年、106～18 ページ）；後藤総一郎『郷土研究の思想と方法』、伝統と現代社、1981 年、39～86 ページ。
- 86) 柳田国男『故郷七十年』（『定本柳田國男集』別巻 3、筑摩書房、1971 年、187 ページ）。
- 87) 新渡戸稲造「郷土を如何に観るか」（『郷土』、創刊号、1930 年）。
- 88) 伊藤幹治『柳田国男と文化ナショナリズム』、岩波書店、2002 年、50～4 ページ。
- 89) 柳田国男研究会編著『柳田国男伝〔別冊付〕』、三一書房、1988 年、244 ページ。
- 90) 新渡戸稲造「序」（小田内通敏『聚落と地理』、古今書院、1927 年、2 ページ）；石黒忠篤「新渡戸先生と郷土会」（『全集』別巻、1987 年、335～41 ページ）。
- 91) 新渡戸稲造「序」（小田内通敏『聚落と地理』、古今書院、1927 年、1 ページ）。
- 92) 新渡戸稲造、同上書、2～3 ページ。
- 93) 柳田は、1907（明治 40）年に行なわれた新渡戸による「地方の研究」の講演を聴講していた。柳田国男研究会編著『柳田国男伝』、三一書房、1988 年、396 ページ。
- 94) 新渡戸稲造、前掲論文、1907 年、1～2 ページ。
- 95) 小田内通敏『日本郷土学』、日本評論社、1940 年、329～30 ページ。
- 96) 柳田国男『郷土会記録 序』（『定本柳田國男集』第 23 巻、筑摩書房、1970 年、108～9 ページ）。
- 97) 柳田国男編『郷土会記録』、大岡山書店、1925 年。
- 98) 宮田登「郷土会と郷土教育運動」（児玉幸多・林英夫・芳賀登編『地方史の思想と視点』、1976 年）。
- 99) 柳田国男『故郷七十年』（『定本柳田國男集』別巻 3、筑摩書房、1971 年、187～8 ページ）。
- 100) 山下紘一郎「郷土会とその人びと」（柳田国男研究会編著、前掲書、1988 年、401 ページ）。
- 101) 柳田国男『故郷七十年』（『定本柳田國男集』別巻 3、筑摩書房、1971 年、366～7 ページ）。
- 102) 同上書、188 ページ。
- 103) これらの論考は、一連の農政学の論考として位置付けることができる。拙稿、前掲論文、2010 年、83～125 ページ。
- 104) 飯倉照平編『柳田国男南方熊楠往復書簡集』、平凡社、1976 年、330 ページ。
- 105) 同上書、371 ページ。
- 106) 南方熊楠「『郷土研究』の記者に与うる書」（『郷土研究』、第 2 巻 5～7 号、1914 年；飯倉照平編、前掲書、1976 年、372～4 ページ）。
- 107) 柳田国男「南方氏の書簡について」（『郷土研究』、第 2 巻 7 号、1914 年；飯倉照平編、前掲書、1976 年、380～1 ページ）。
- 108) 高木敏雄「郷土研究の本質」（『郷土研究』、第 1 巻 1 号、1913 年、10～1 ページ）。
- 109) 荒井庸一「雑誌『郷土研究』」（柳田国男研究会編著、前掲書、1988 年、451～53 ページ）。
- 110) 『郷土研究』誌の投稿者には、早川孝太郎（1889-1956）や折口信夫（1887-1953）など、投稿をきっかけに柳田に見出され、その後、民俗学者となった人が多い。荒井庸一「雑誌『郷土研究』」（柳田国男研究会編著、前掲書、1988 年、453～81 ページ）。
- 111) 柳田との比較については、村松玄太「近代日本における地方の思想に関する一考察——新渡戸稲造と柳田國男の地方観を中心に」（『政治学研究論集』（明治大学大学院政治経済学研究科）、第 14 号、2001

- 年、69～83 ページ)。
- 112) 鵜野祐介、前掲論文、1991 年、216～26 ページ。
 - 113) 芳賀登『柳田国男と平田篤胤』、皓星社、1997 年、234～56 ページ；佐藤俊一「井上円了と新渡戸稲造 — 田学と地方学を中心に」(『東洋法学』、第 53 卷 3 号、2010 年、313～41 ページ)。
 - 114) 小田内通敏「日本人文地理学の啓蒙期(2)」(『新地理』、第 2 卷 7 号、1948 年、15～22 ページ)。
 - 115) 新渡戸稲造「序」(小田内通敏、前掲書、1927 年、3 ページ)。
 - 116) 小田内通敏「郷土地理」(『岩波講座 地理学』、岩波書店、1932 年、70 ページ)；同著「日本人文地理学の啓蒙期 (二)」(『新地理』、第 2 卷 7 号、1948 年、15～22 ページ)；同著「人文地理学への歩み — 方法論とその実践への結合の提唱」(『人文地理』、第 3 卷 3 号、1951 年、1～11 ページ)。
 - 117) 当時の大都市近郊の変化については、拙稿「京阪神地方の土地開発と郊外神話の誕生 — 報徳主義思想の一断面」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第 9 号、2004 年、258～24 ページ)。
 - 118) 岡田俊裕「小田内通敏の地理学研究 — 在野的・非主流派地理学の形成」(『地理科学』、第 50 卷 4 号、1995 年、233～49 ページ)。
 - 119) 小田内通敏『帝都と近郊』、大倉研究所、1918 年、88～143 ページ；関戸明子「昭和初期までの村落地理学研究の系譜 — 小田内通敏の業績を中心に」(『奈良女子大学地理学研究報告』、第 4 号、1992 年、167～91 ページ)。
 - 120) 小田内通敏、前掲書、1918 年、134～73 ページ。
 - 121) 小田内通敏「人文地理学への歩み — 方法論とその実践への結合の提唱」(『人文地理』、第 3 卷 3 号、1951 年、1～11 ページ)。
 - 122) 小田内通敏「集落地理」(『経済学全集 38』、改造社、1931 年、280～408 ページ)。
 - 123) 野澤秀樹「柳田国男と小田内通敏 — 「郷土研究」をめぐる」(『放送大学研究年報』、第 26 号、2008 年、127～42 ページ)。
 - 124) 柳田国男「郷土誌編纂者の用意」(『定本柳田国男集』第 25 卷、筑摩書房、1970 年、5～13 ページ)。
 - 125) 柳田国男「村を觀んとする人の為に」(同上書、41 ページ)。
 - 126) 柳田国男「郷土研究といふこと」(同上書、214～5 ページ)。
 - 127) 柳田国男「郷土研究と郷土教育」(『郷土教育』第 27 号；『定本』第 24 卷、66～94 ページ)。
 - 128) 柳田国男『民間伝承論』(『定本柳田国男集』第 25 卷、筑摩書房、1970 年、331～7 ページ。柳田はヨーロッパからの帰国後、大正末期から昭和初期にかけて、自らの学問を体系化する試みのなかで、いわゆる自然科学的な方法論を自らの学問の方法論として取り入れている。川田稔『柳田国男の思想史的研究』、未来社、1985 年。
 - 129) 柳田国男『民間伝承論』(『定本柳田国男集』第 25 卷、筑摩書房、1970 年、331～7 ページ)。
 - 130) 柳田国男「郷土研究といふこと」(同上書、218 ページ)。
 - 131) 関戸明子「昭和初期までの村落地理研究の系譜 — 小田内通敏の業績を中心に」(『奈良女子大学地理学研究報告』、第 4 号、1992 年、167～91 ページ)。
 - 132) 小田内通敏「郷土研究の本質 — 国民教育の立場から」(『地理歴史教育』、第 1 卷 1 号、1929 年、7～10 ページ)。
 - 133) 白井哲之「昭和前期刊行『綜合郷土研究』についての考察 — 地誌の記述方法の変化について」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』、第 15 号、2004 年、59～73 ページ)；齊藤太郎「昭和戦前綜合郷土

- 研究と地域教育運動——『総合郷土研究 秋田県』の郷土認識研究における一主題」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』、第6号、2004年、33～40ページ）。
- 134) 柳田国男「郷土研究と郷土教育」（『定本柳田國男集』第24巻、筑摩書房、1970年、68ページ）。
- 135) 伊藤幹治、前掲書、2002年、54ページ。
- 136) 郷土研究は19世紀イングランドでも盛んに行なわれるようになるが、それはローカルな社会からナショナルな社会へと接続する動きの一環として理解された。これをつないだものが、郷党精神であり、パトリオティズム（郷土への愛着）であった。伊藤航多「市民文化としての「郷土研究」——19世紀イングランドの都市における歴史文化とその社会的理念」（『史学雑誌』、第118編10号、2009年、38～61ページ）。
- 137) 芳賀登、前掲書、1972年、102～4ページ。郷土教育と地域教育との関連については、斉藤太郎、前掲論文、2004年、33～40ページ。
- 138) 新渡戸稲造、前掲書、1976年、370～4ページ。
- 139) 鶴見俊輔、前掲論文、1960年、215ページ。
- 140) 『校友会雑誌』、第160号、1906年10月、75～6ページ。
- 141) 松井慎一郎「新渡戸・内村門下の社会派官僚について」（『日本史研究』、第495号、2003年、29～55ページ）。
- 142) 堀切善次郎編『前田多門 その文その人』、私家版、1963年、15ページ。矢内原もこの社会性に大きな影響を受けたことを回想している。矢内原は「社交主義」とよばれていたと語っている。矢内原忠雄『余の尊敬する人物』、岩波新書、1940年、184～8ページ。
- 143) 筒井清忠『近衛文麿——教養主義的ポピュリストの悲劇』（岩波現代文庫、2009年、298～300ページ）によれば、新渡戸の場合は、現実との接点をもとうとする教養主義であり、それゆえに柔軟で折衷主義的なものとなる。
- 144) 松井慎一郎『河合栄治郎——戦闘的自由主義者の真実』、中公新書、2009年、93～132ページ。
- 145) 住谷一彦、前掲論文、2010年、213ページ。
- 146) 加藤節『南原繁——近代日本と知識人』、岩波新書、1997年、47～106ページ。
- 147) 内川永一郎『晩年の稲造——共存共栄を説く』、岩手日報社、1984年。
- 148) 新渡戸稲造、前掲書、1976年、370ページ。
- 149) 伊藤善市「新渡戸博士の経済思想」（東京女子大学新渡戸稲造研究会、前掲書、1969年、243～57ページ）。
- 150) 太田尚樹『明治のサムライ——「武士道」新渡戸稲造、軍部とたたかう』、文春新書、2008年。
- 151) 崎浦誠治「解題」（新渡戸稲造、前掲書、1976年、10～4ページ）。
- 152) 拙稿「石橋湛山の農業政策論と報徳思想の影響」（『京都産業大学論集社会科学系列』、第25号、2008年、21～48ページ）。

Inazou Nitobe and the Design of Ruriology

— Agricultural Administration and Native District Study —

Nobuhisa NAMIMATSU

Abstract

Inazou Nitobe (1862–1933) advocated ruriology. He elaborated a plan in study for the area not a district. He was interested in Japan as the native district, and he had abundant international experience. There are much results of research about his internationality and Christianity, but few results of research that treated his ruriology. A purpose of this report is to elucidate his design process of the ruriology. Furthermore, this report considers a formation process of new study.

Nitobe wrote a famous book called “Bushido”, and for the same period wrote the book called “Agriculture Basic Principle”. This book was written as a premise of the agricultural administration. This book did not contribute to agricultural administration, but treated a wide field. A rural frame was necessary to treat a wide field in this book. Therefore, this book led to his ruriology.

He was really engaged in local promotion as well as the writing of the book. This was the Taiwanese sugar business policy. He makes use of experience and performs the lecture of the colonial policy at Kyoto Imperial University. Importance of the land use was removed by this lecture. The lecture leads to native district study with a purpose to elucidate “land and relations with the human life”.

The ruriology is aimed for the relief of the farm village and studies the local history, culture, manners and customs. He was going to discover the good point of the farm village. However, his ruriology was not to intend for only limited space called the farm village.

Kunio Yanagida (1875–1962) was affected by the ruriology and started the native district meeting which assumed Nitobe a sponsor. The ruriology did not become the systematic study. However, many new sciences were born from the native district meeting. For example, folklore of Yanagida, and anthropogeography of Michitoshi Odauchi (1875–1954). The folklore of Yanagida had the side to be poor at economic consideration. The anthropogeography of Odauchi was lacking in universality as the science.

Keyword : Inazou Nitobe, Ruriology, Native district study, Kunio Yanagida,
Michitoshi Odauchi